

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



第八十二卷第七号  
日本幼稚園協会

7

# すぐ遊べるゲーム

有木昭久・著 B5判・各200頁・定価1,800円・3巻セットケース入り・セット定価各5,400円

- あなたも遊びの名人になれます。
- すぐ遊べるゲームの名ガイドブック。



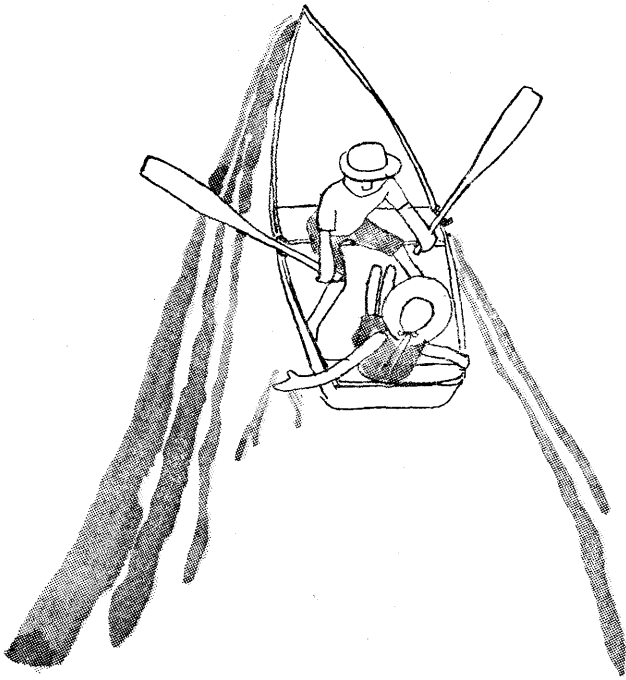
新刊!

- ① 3・4歳児 (4・5・6・7月)
- ② 3・4歳児 (8・9・10・11月)
- ③ 3・4歳児 (12・1・2・3月)
- ④ 5歳児 (4・5・6・7月)
- ⑤ 5歳児 (8・9・10・11月)
- ⑥ 5歳児 (12・1・2・3月)

どのページを開いても、遊びがたのしいイラストで、わかりやすく紹介されています。遊びの基本型と応用の展開例があげてあり、子どもの状態に応じた指導の参考になります。子どもの好きな遊びが

年齢別を選べるようになっているので、使いやすくなっています。3・4歳児の友だちづくりから5歳児のダイナミックな遊びまで種類が豊富です。

# 幼児の教育



第八十三卷 第七号

# 幼児の教育目次

— 第八十三卷 七月号 —

© 1984

日本幼稚園協会

幼児教育に対する期待と不安……………太田次郎…(4)

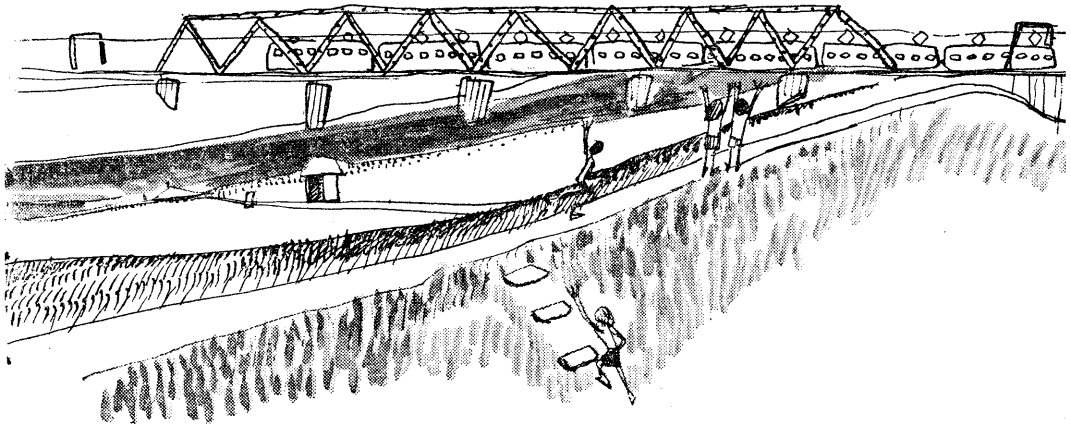
教育改革にのぞむもの一言……………堀合文子…(6)

幼稚園教員免許の改正案……………岡田正章…(10)

「しつけ」の理論について……………波多野完治…(12)

— 高橋恵子博士の『自立への旅たち』に関連して —

いろいろなことを教えてくれる子どもたち④…村石京子…(18)



《子どもと環境》

くらしに顔を出した小さな動き、大きな動き…泉 本 晋 一…(22)

父とまんとみ幼稚園…近藤千恵子…(26)

児童公園・遊園をめぐって…植田 敦 子…(30)

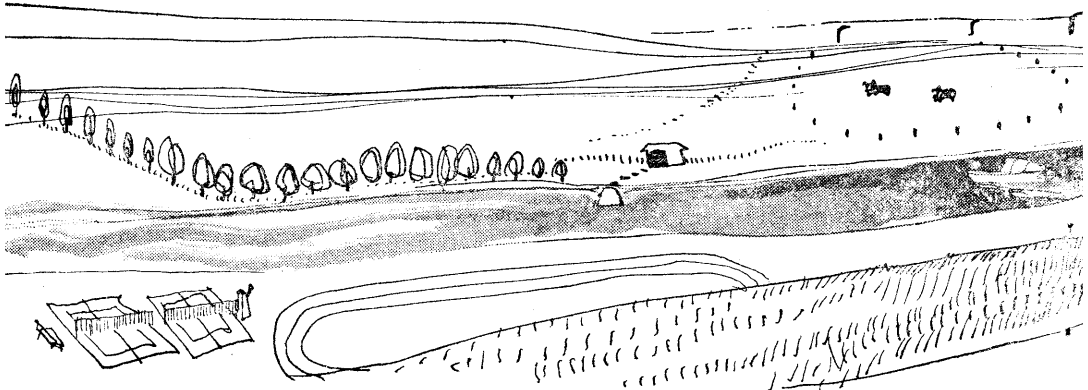
階段のある園舎と子ども…黒田 成 子…(36)

幼児施設の計画視点…小川 信 子…(41)

近代短歌に現われた子ども(十八)…大塚 雅 彦…(44)

ニュージーランドにおける就学前教育の  
歴史ならびに現状(九)…松川由紀子…(52)

表 紙・安井 淡  
表紙題字・比田井和子  
カ ッ ト・福田 理恵



## 幼児教育に対する期待と不安

太田次郎

現在ほど、幼稚園が大切な時代はないといえる。そのおもな理由は、子どもの数が少なくなったことである。同年齢や近い年齢の子どもと接するといふ、幼児期になさねばならぬ体験の場が、幼稚園や保育園以外には見当らなくなっている。昔は隣近所にちよつと声をかければ、たちまち子どもの集団ができたし、同じ家庭の中でも兄弟・姉妹で遊ぶことができた。しかし、今はそれがむずかしくなった。子どもの数の減少だけではなく、子どもの生活もかわって、おけいこごとなどに時間をうばわれ、いっしょに遊ぶ時間をつくり出しにくくなった。こうして、遊びを知らぬ子どもがふえるおそれがある。さらに、小学校以後の教育では、偏差値という妙なものが横行し、ますます子どもの生活の内容

は貧困になりつつある。

この現状を肯定する人は少ないであろう。そして、そのような傾向に歯止めをかけて、子どもに生活をとり戻させる役割をになえるのは、幼稚園ではなからうか。遊ぶことの楽しさと充実感、それに伴うある種の厳しさを身につけさせるのには、今ではほかにないように思われる。

そう考えると、幼稚園を中心とする幼児教育に対する期待が、今日ほど大きい時代はないといつても過言ではない。

〇〇〇

では、現状はその期待にこたえているだろうか。残念ながら、大丈夫と胸をはっていえる状況にはないように思われる。

幼稚園における遊びの重要性については、今さらいうまでもないであろう。しかし、遊びを中心とした保育とは、ただ子どもの活動のままに任せて、保育者が何もしない保育ではないし、またもしそんなことをしたら、子どもの遊びは成り立たないである

う。さらに、遊びとは、知的な要素と対立するものではない。

こんな当り前のことを、いわねばならぬところに、問題があるのではなからうか。筆者は、しばしば早期の知的つめ込み教育の弊害を訴え、幼稚園は小学校の予備校的存在になることを防ぐ必要を強調してきた。しかし、そのことは、幼稚園が旧態依然としたままで良いという意味ではなかった。園をとりまくもろもろの環境は著しく変動している。その動きに流されては困るが、それに全く無関心で、伝統さえ重んじていれば事足りるのである、何の進歩もないであろう。

しかし、自由保育とか情操教育とかいう実態のない言葉によって、保育内容の進展がはばまれていくような感じがする。そして、妙な聖域意識に守られて、安易な保育がなされることも少なくないのでなからうか。

〇〇〇

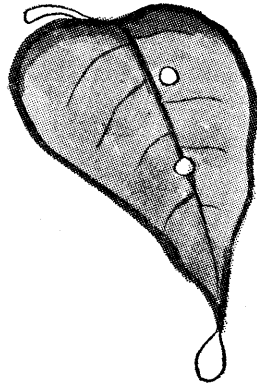
このような方がいい方が、日常保育に励まれている方

々にとって、失礼なことは自覚している。しかし、現在幼児教育のおかれている状況は、甘言をもてあそぶ余裕などないように思われる。

内からは園児の減少による経営の問題が、外からは教育の刷新という名による圧力が、幼稚園をじよにしめつけている。こんなとき、保育の目標や内容が明確でなく、ただ漫然と日々を過していたら、内外の重圧につぶされてしまうおそれがある。

毎年夏になると、幼児教育に関する各種の研究会が開かれている。そこへ招かれていくと、どういわけか積み重ねがなくて、年々、同じことが論じられていく感じがする。おそらく、先生方の世代交代が早いためであるが、そのような状況ではいつまでたっても、保育内容は充実しないであろう。

小学校低学年と幼稚園の一体化が論じられているとき、知的な内容も含めて、幼稚園の方からカリキュラムの提案をするぐらいの気概をもたないと、幼児教育に対する期待感がみだされないように思われる。  
(お茶の水女子大学)



## 教育改革にのぞむもの一言

堀合 文子

教育改革が最近いろいろな形で考えられています。私など関心は示しても、それに対してとやかくもの申す事はできず、又その資格もありませんが、改革が考えられるこの機会に現場の声の一つとして聞いていただきたいと思えます。

○最近の幼児は成長が早い。昔の幼児より一年はちがう。

こうゆう言葉はよく聞くし、そのために、義務教育を一年さげるなどの事まで言われてしまっています。たしかに体は大きくなり、話をする、積極的だし、内容もわかったような事を話しています。しかし、現場の幼児をみて下さい”と叫びたいのが現場からの声だと思いま



す。

表面をみただけでは確かに成長が早いように見えますが、現場の我々が毎日幼児と生活してみると決して成長が早いとは思いません。社会状況が刻々と変化している中で生を受けて三年、四年の間に、目から耳から外側からはいる事は大変多く、殆んど彼らの人生はその氾濫です。外側からの成長はしても核家族のため内面的な成長は大変乏しく、成長していませんので、新入園児を受け入れた時にはその内面に個々が持てる、独特の能力は蔭をひそめていますし、特にこれから一番大切な内面的、精神的なものは、全くと言っていいくらい成長していません。

幼稚園や保育園の生活をするために、いろいろと経験していく上には、いえ人生のためにも、何ととってもこの内面的な成長が基礎になります。この所を教育しておかないとその上にいくらよき教育をされてもこれは上塗りにすぎず、はげてしまう時がきます。でこの内面の成長のためには、教えこんでできるわけでもなく、幼児と

教師が生活を共にしながら、幼児も又自分たちの生活と十分に生活しながら成長してゆくのでこれには一年も又それ以上もかかります。

今までの人たちは家庭でその点完全でなくても成長の方向にむけていたので幼児教育としても経験をしつつ、更にのばすことができたのが、幼稚園で基のところを引だすだけに時間がかかり経験し伸張させる所までゆかず、そのためには一年かゝり、逆に一年延長したいと思うのが今の幼児教育です。

表面の発達のみをみてそこへ文字教育などはもつての外です。この点就学を下げるなど現場では考えられないことです。

○教師が幼児教育にはものを言います。

これは幼児教育ばかりではない事で何はともあれ、先生がよき先生でなければいけないのは言うまでもありませんが、特に、前述のような幼児期の現状なので、特に

先生の姿をみて成長してゆく幼児には、理屈でない大切な教育がそこにあります。それが戦後の養成は学問が進歩というか重要視され、違った意味の立派な先生が養成され、理屈の上ばかりで理論的と言われ立派なようにみえても、決して幼児の教育にはプラスになる事はあまりありません。

「心」はどこへ言ったのかと思うような、何か理屈の尺度ではかり計る先生が多く、いくらよい事を知っても、解っても、幼児には通じなく、先生自身も苦勞し、根本的にどうしても先生も理解できなく、幼児も成長せず、何の教育もできてないのが幼児教育の現状のようにみうけます。

大学卒もよいですし、幼児教育者はすべて最高のものを修めるのが本当です。しかしみんな中途半端な教育が邪魔しているようにみえます。これは先生がわるいのではなく、戦後改革された教員養成のカリキュラムが悪いのではないかと考えられます。又制度自体もずさんの様で唯、単位をとれる、とれるものはとっておこ

うなど、そこには人を教育するという真剣さがありません。免許状のある人は自分の希望でなくても一時増加した幼稚園施設は他の就職はできなくても幼稚園へは就職できた人救いのような職場に変わり、その為、どんどん先生の質の低下、学問があっても質の低下です。これがどんなに幼児教育にマイナスの影響をもたらしたか、今大きな大きなマイナスがでていいるのではないのでしょうか。

もっと本当の頭のよい、幼児教育者としてふさわしい先生を、カリキュラムを養成してほしいと思います。養成のカリキュラムから緻密に考えなおしてほしいものです。

安易な免許取得が一番禁物ではないでしょうか。

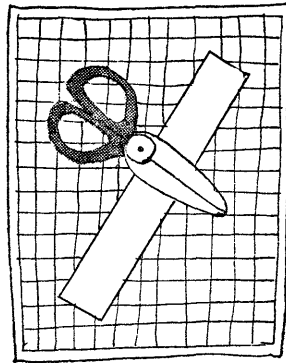
○幼児教育者には小学校教育者が停年又はその他で移行しないでいただきたい。

幼稚園は独得のものがあり、幼稚園の先生が小学校へ

移行するのはよくても逆はよくありませんが、これが世の中に大変多い状態で、特に上司にいたゞいた時の現場の苦勞、不理解がどんなに幼児教育にマイナスを作っているでしょうか。この点も政治的規約に考慮してほしいところです。

以上、一端で、困っているところがちがうかもしれませんが、せんが一現場職員の希望であり幼児教育の将来をうれうる一人として、現場の末端の状態を見、我々がうれうてもうれうても手のとどかない所は政治的考慮により一番学校教育で大切なこの時期の教育を慎重に考えていただきたいと思ひます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



RIE

## 幼稚園教員免許の改正案

岡田正章

文部省は、三月二十七日、教育職員免許法の改正案を国会に提出した。この改正案に対しては、野党の強い反対が予想されており、どのように決定されるかは定かでない。

文部省は、昭和五十八年六月、大臣の諮問機関である教育職員養成審議会に、「教員の養成及び免許制度の改善について」改善のための試案を添えて諮問した。改善の理由として「現在、国民の間には、初等中等教育に携わる教員に対して、広い教養、豊かな人間性、深い教育的愛情、教育者としての使命感、充実した指導力、児

童・生徒との心の触れ合いなどを一層求める声が強い」ことをあげ、この要請にこたえるべく、教員の養成・免許を改め、その資質能力の向上を図ることにあるとしている。

端的にいうならば、学校内暴力・非行など学校教育上もつとも憂慮すべき事態が惹き起こされていることに対応すべく、教員がその責に任ずべく、養成を徹底し、このためには免許状が従来よりも取得しにくくなることもやむを得ないとするものといえよう。

諮問を受けた審議会は、約五か月間、七回の総会と七回の免許基準専門委員会を開き、昭和五十八年十一月、おおむね文部省が参考資料として添えた改正試案にそつた内容の答申をまとめ、文部大臣に提出した。

これによれば、幼稚園教員の免許状は、他の学校教員の免許状同様三種類の免許状となる。その一つは、大学学部卒業を基礎資格とする免許状で、教員として期待される資質能力の標準的な水準を示すものとして、「標準免許状」と名づけられる。

第二は、大学院修士課程修了程度を基礎資格とする免許状で、標準免許状を取得したと同様に資質能力を有し、さらに修士課程等において特定の専攻分野に係る単位を修得し、高度の資質能力を備えていることを明らかにするものとして「特修免許状」と名づけられる。

第三は、短期大学卒業程度を基礎資格とする免許状で、これを有する者に更に一層の研さんを期待することを示すものとして「初級免許状」と名づけられる。

次に、各免許状を取得するためには、従来におけるよりも、大学において履習しなければならないこととなる。幼稚園教員の場合、教職に関する専門科目が、初級免許状については十八単位から三十単位へ、標準免許状については二十八単位から五十四単位へそれぞれ単位数が増加する。

さらに、教育実習が、初級免許状・標準免許状の何れにおいても四単位から八単位へ倍増される。

教職に関する専門科目の必修単位中「幼児の心身の成長と発達に関する科目」が試案にかかげられていた。審

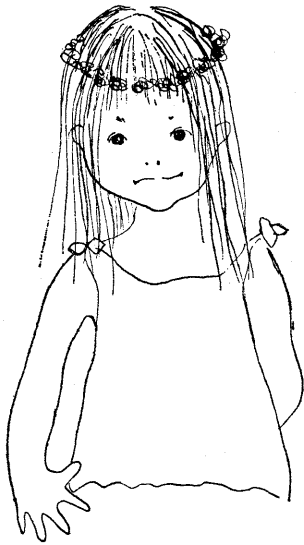
議の過程において、これが小学校教員におけると同様「幼児の心身の発達と学習の過程に関する科目」に変えられようとした。これに対し、日本保育学会から「学習ということばを用いると、今日の社会的状況のもとでは、幼児期から偏った知的教育の風潮を助長させるおそれがあるので、これを用いることは望ましくありません」という要望が出されたりして、「幼児の心身の発達に関する科目」となったりした経過がある。

また、教育実習の時間数が増すことは、その指導が適切なものであるならば、大きな意義を有する。ただ、保育界では、幼稚園教員と保育所保育母とがともに就学前幼児の教育を担当している事実にかんがみ、しかし、両者の資格取得要件が、文部・厚生両省によって二元的に規定されるという制度とのかかわりで、幼稚園教員の養成の履習単位数が増加することが、両者の資格を分離させることになりかねない。こうしたことについての配慮がたいせつな問題として残されているように思われる。

(宝仙学園短期大学)

# 「しつけ」の理論について

——高橋恵子博士の『自立への旅だち』に関連して——



波多野 完治

(1)

高橋恵子博士の「自立への旅だち」は、「ゼロオレ二才児を育てる」という副題をもっている。このことからもわかるとおり、これは、「育児」のハウツーにも役立つように企画され、執筆されたものである。われわれは、この本のいたるところに、「新しい育児」についてのヒントや暗示をよみとることができる。

しかし、同時に、この本は、育児、とくに「しつけ」

についての原理的な主張をふまえて書かれているので、「しつけ」の理論について、根本的な反省をするための、よい機会をも提供している。ここで問題にしたいのは、そのしつけ原理についての面である。

しつけ、というと、従来は、子どもを「社会化」させるための方式として、漠然とうけとられ、したがって、しつけの本といえば、世の中で「よい子」とされている子どもに向かって、赤ん坊をどう習慣づけるか、ということに関心のむいたものが多かった。「よい子」というのは、社会で規範とされていることに無批判に従い、あまり社会から逸脱した行為をしない子ども、とくに、具体的には、教師と両親のいうことは無条件にまもるような子どもである。つまり、デュルケムのな意味での社会威圧に服するのが、よい子の第一の資格であった、といえるだろう。

ところが著者によると、こういうよい子の社会は、現代ではむしろその存在があやういとされており、二十一世紀という、まったく未知の世界にのり出していく人間

としては、不適応をおかすおそれさえある。現在以後、しつけは、もっと子どもの多様な能力をのばす方向に行われなくてはならぬ。

そのために大切になるのが、つぎの二つの原則である。

第一は「愛着と自立」である。愛着については、ハーローのサルの実験が有名で、一時ブームの観を呈したが、著者は、ハーローの実験は、サルについて行われたものとして、どちらかというところをしりぞける。ハーローのサルは、サルとしても異常な環境におかれたものである。ふつうのサルは集団で生活しているのに、ハーローのサルは、母子のみという孤立した状況で飼育されている。授乳の方法も、実験のためとはいえ、異常である。こういう異常な条件の下でおこなわれた実験結果を、それがいかに説得的であろうとも、そのまま人間のふつうの生活に適用してよい筈がない。つまり、ハーローの実験から人間の赤ん坊まで、われわれは、たくさんのミッシング・リンクをもつのである。

愛着が人格発展の原理の一つだということをかりに承認するとして、ハーローのサルには自立の要素がかけられている。これに反して、人間においては、自立の要求はきわめてつよく、「愛着のなかに自立がある」といってもよいくらいである。これは人間には本来的にコミュニケーションの要求があることから来ているらしい、と著者は考えている。この基本構造は、フランスの心理学者ワロンのはじめて提出したものだが、著者もほぼ同じ仮説を提示している。

第二の原理は、人間の人格は無限の可能性をもったもので、「三才までにきまる」とか、「三才ではおそすぎ」というのは、科学の仮面をかぶった迷信だ、というものである。日本ではこの主張は、「三つ子のたましい百まで」というような、伝統的児童観と融合した形で出て来たために、大きな説得力をもった。そうして一種の宿命観のようなものになり、知識層からブルーカラーにいたるまで、全てがそれに染まる、というような観を呈した。著者はこれに反撥する。そうして、人格の基礎の

かなりな部分は、○才から二才までにきまるにせよ、それが宿命となって人間の一生を左右するようなことは絶対にない、と力づよく、述べるのである。人間は、一生、可変的なものであり、方法がよく、努力すれば、状況に応じた人格をみずからつくりあげることができると。この点では、著者は、ワロン風のフランス児童心理学の影響とともに、アメリカ風の楽観主義的育児論の影響をつよくうけていて、人間の教育による変化の面をみおとしていないので、読後に壮快な感をあたえる。

このように、二つの原理によってしつけの目的と方法を説くので、著者の主張は、一種の自然主義の観を呈する。第二の原理は、人間の人格は、赤ん坊のときにきまるのでなく、その後、幼児、児童、青年、と、どんどん変っていき、また変わりうるものであると主張するので、ある程度、条件反射的の児童観に近い。しかし、条件反射学が食物および食物にむすびついた「条件刺戟」を極端に重視するのに対し、著者は、愛着および愛着における自立を原理とする第二の原則を立てるので、条件



反射主義からまぬかれている。しかし、しつけを「社会化」のためとみないで、人格の多様化、多面化のためと考える点で、社会適応主義からまぬかれている。

このように考えると、著者の考える「しつけ」理論の新しさが理解できよう。著者はこのような自らおこなった二十年にわたる愛着の科学的研究の成果として、旧来の社会に適応するしつけではなく、未来の、二十一世紀のためのしつけの展望を開いてみせてくれたのである。

こういう立場から、著者は、現在ひろく行われているしつけの理論および実践にふかい憂慮を表明している。育児は著者のような原理にもとづけば、楽しく、のんびりとやれる筈のものである。早く早くと子どもをせきたてようとするから「大変な」ものになり、つらいものになる。現代の育児が母親の苦勞のタネになっているとすれば、それはいまの育児原理がまちがっているからではないか、と著者はいうのである。

(2)

わたしは著者の主張する育児理論に大部分賛成である。実は、わたしの女房が高橋博士のいう育児原理の萌芽をつくったのではないか、という自負さえある。だから本書の内容に異議をさしはさむべき理由は毛頭ない。ただ、問題を呈示するような仕方をまったく別の角度からながめてみよう。

著者はいう。

「三つ子の魂百まで」ということわざは、日本人の中には特に根強いものですが、すでに見てきたように生涯にわたる長い時間の中で人間の变化の可能性の大きさの方に、私たちはむしろ注目すべきです。実際、その証拠がたくさんあるわけですし、子どもが自分で選び、自分で学び、軌道を修正するという自己学習能力は非常に高く、育児において取り返しのつかないような誤りというもの、は、まずないと考えた方がよいと思います。

「母と子」の絆については、最近、胎児期までさかのぼって、あるいは生まれてすぐに母と子の絆をつくる敏感期があるなどといわれていますが、そういう科学的根拠はたしかなものではありません。それほど反証がで

つつあります。すでに見てきたように、人間の赤ちゃんが特に人間に魅かれるようになるには、生後三か月ほどかかります。それからさらに人間の中でもとりわけこの人が重要だと選ぶようになるには、これを母と子の絆というのですが、半年から一年もかかるのです。

つまり「絆」は、いろいろな経験を積み重ねてようやくできるものであって、生んだからとか、母胎の中に入ったからとか、産後すぐに子どもに触ったからというようなことでは説明できません。第一、母と子の「絆」が生後数日、あるいは数週の間にはできないなどということは、乳児の能力からいっても不可能です。「絆」は決して神秘的なものではありません。半年から一年の間にかけて、子どもが検討し、自分はこの人が気に入ったと選ぶものです。また初めの愛着の相手が母親でないこともありますし、それが特に問題だというわけではないこともすでに見てきたとおりです。

また次のようにもいっている。

ひと昔もふた昔も前ならば、迷信だと笑いとばしていたものでも、最近では胎児の動く姿をテレビで見せて、胎児がそんなことをすると泣いていますよ、あるいは苦

しんでいますよ、などと解釈してみたり、科学的な実験の結果だといったりして、科学の衣を着せて強調したりされます。また、隔離したサルの実験結果を見せて、人間もこうなるのだとサルから人に一気に思考を飛ばせてしまいます。このように、あたかも確実な科学的な根があるようなかたちで、テレビや活字でせまってくる情報に、きちんと対処できるようにしなければなりません。

迷信ではないという顔をしている迷信や偏見ほど、恐ろしいものではありません。こういうものをはねのける強さを、今、親や保育者は必要とされているのです。

これらの引用をみると、著者は、現代の俗見にはげしく反対しているのがわかり、その真率な態度に頭が下がるが、同時に著者は現代の俗見に「正面から反対する態度」で物をいっている。

日本の育児には、伝統があって、「血のつながり」に不思議な力をみとめるのである。そうして、これに反対するものは、必ず敗れるか、または、大へんな長い苦勞の後にはじめて成功するかのいずれかである。

わたしは、昭和のはじめ以来、教育の近代化を志し、

五十年ほど苦しい闘いを闘ってきた。その結果、日本の教育は近代化されたか。

少しは近代化された、といえるであろう。しかし、わたしたちの努力の量に比べれば、その成功の度合はすくない。つまり、わたしたちは、「生徒と教師との心のきずな」という、日本教育の伝統的気風を無視する傾向があり、それがために成功しなかったのだ、と八十才になってわたしは悟ったのである。

いま、高橋博士のことを聞いてみると、「ああ、この人もやっばり」と

という思いを止めることができない。つまり、説得のための基本的な姿勢を欠いているのであろう。

日本の育児の伝統は長い。そしてそれは血の信仰を基調にしている。この場合には、血の信仰を破壊しない形での「新しい育児」の導入を考えなくては、新しい育児原理を日本の育児に組み入れることはむずかしい。これが「説得の心理」の訓えるところである。実をいうと、「三才までにきまる」とか「三才ではおすすぎる」とか

いっている諸君も、日本人のこの心理にうまく乗ったからこそ、あのような勢力になることができたのである。

ケーガンのような「人間の発達では、連続性というものが、きわめて小さいことです」（本書八ページ）という立言が、たやすくまかり通る世界に、日本心性はいないのだ。これは悲しいことだが、事実なのである。いつも昔の原理にたしかえることによって、日本では新しいものが正当化される。教育においては特にそうである。これは、わたしが教育革新運動を六十年つづけて、骨身にしみてわかったことである。

高橋博士の「自立への旅立ち」は、本当によい本である。しかし、この本によって、正しい育児にきりかえてくれる人はすくないのではないか、とわたしはおそれる。わたしは高橋博士が新しい育児原理のために、その理論をでなく、その普及の方法を根本から考えなおすことを心からねがわずにはいられない。その原理が革命的であればあるだけ、その普及は、日本では「復古」の形をとらざるを得ないのである。

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ④

村石 京子

大雪のこと

この項を書いている今日はお彼岸の中日、春分の日なのですが、東京は昨夜から引き続いてのみぞれ模様の空です。昔から暑さ寒さも彼岸までと言われているのに、今年はどうも例年になく春の訪れはおそいようです。

冬の間は寒さがとても厳しくて、東京も大雪がよ

く降りました。窓ガラス越しに、空から果てしなく降りてくる羽毛のような綿雪に見入ったり、きらきらと朝日を浴びて輝く銀世界に歓声をあげたりしたものでした。そして外に出ると、夕べからの積雪が凍りついた道路であやうく転倒しかかったり、なれない雪かきに汗だくになったりと、雪の珍らしい都会人間はいつもの冬とは違った経験をして、北国の冬の厳しさをほんの少しかいま見た年でもありません。

た。

幼稚園の子どもたちは、とにかくこの珍らしい情景に大喜びしたものです。長靴・オーバー・帽子・手袋と防寒支度に身をつつみ、嬉々として園庭に飛び出していきました。そしてひとしきりはずぶずぶと雪の中を走りまわり、友だちに雪玉を投げあった後、雪滑りや雪だるまづくりに熱中しました。

けれどこの雪も珍らしいうちはよいとして、何回ともなってくると、私たち大人は電車の往き帰りだの、家に在ったりするときは何だかもううんざりねと言いつつあつたものです。でも不思議なことに、幼稚園の子どもたちと過ごす時間になると雪はいつも清々しく美しく見えて、私も子どもたちと同じように、冬の天からの贈り物に心はずむ思いがしたのは何故だったのでしょうか。多分、子どもたちの持っている囲りのものを楽しくしていく遊び心が、自然に私にも伝わってきたからだと思います。子どもたちは、背丈よりも大きな立派な雪だるまをつくった

り、かまくらをつくって入ったり、雪のすべり台をつくって箱ぞりで滑り降りたりして大喜びでした。こんなあそびは子どもたちは生まれてはじめてで、すっかり雪あそびを満喫したことでしょうが、私も就職以来初めての新しいあそびにびっくりしたり、楽しかったりしたものです。

それにしても日が経つと、大通りから寄せられた雪の山が、ほこりをかぶって汚なくみじめになり、とけて消えてはまた降り、とけて消えてはまた降るのくりかえしに、大人たちの間ではもうたくさんとこぼし合われるようになっていきました。けれどそれにはひきかえ、幼稚園の庭や山に降った雪は、ずっと冬のおそびを堪能させてくれましたし、そして最期に残った雪でさえ、ビニール袋に詰められて大事なおみやげとして大切にされていました。珍らしいときだけ喜び、自分たちの生活にプラスにならないとわかると見返りもしないことの多い大人の社会には、これと類似したことが数多くあるのではない

だるうかと、子どもたちの様子と比べて、反省させられたりしたものです。

### ピンクの傘

そんな雪のある日のことです。「明日は東京地方に又々雪が降るかもしれません。」と昨夕の天気予報で言っていたのに、今朝空が明かるかったり、いそいだりが重なって、私は傘を持たずに出て来ました。十時過ぎから粉雪がちらちらしていたと思うと、間もなくせきを切ったように白い花びらが舞い降り降りました。「あ、また雪が降って来た。」やんだら雪あそびしようね、先生。」と早くも心はずませている子どもたちです。画用紙でメガホンをつくらせて「東京地方は大雪注意報です。」と知らせている小さな予報官もいます。

私はガラスのドアから降りしきる空を眺めて、「置き傘あったかしら？」など思っていたとき、傍へ来たS子は私の心が伝わったかのように、「先生、

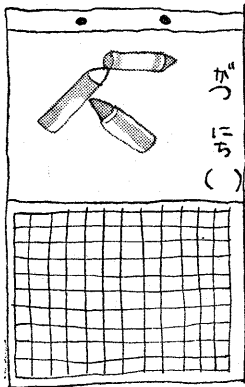
傘持って来た？」と聞きました。「ううん、今日はね、朝降ってなかったので持って来なかったわ。」と言うと、「S子はね、朝降ってなかったけど持って来たのよ。本当よ。ピンクのよ、新しい傘だもの。」と、とても得意そうです。そして「先生、おうち帰れる？ 傘なくちゃかあいそうね。」とちょっぴり同情もしてくれました。が、次々と他の子どもたちとのかかわりあいもあって、今の会話はこれで打ち切りです。やがておべんとうもすみ、帰る時間になったとき、S子がそばへ来て急にこう言いました。「S子ね、大きくなったらね、先生にね、傘あげるわね。私のきれいなピンクの傘あげるわね。大きいから先生だつて入れるわよ。」私は胸がじんとしてしまいました。S子の心の中には午前中の私との会話がずっと繋がっていて、自分が新しい傘をさして帰る前に、自分の気持を一言言い現わしたかったのでしょう。いつも順番が待てなくて「私が」「私が」といいはる自己中心的な面が強いと思っていたS子

が、雪が降って困るでしょうという優しい気持の現われとして語ってくれた言葉に嬉しくて、子どもたちが帰ってからも、真白く染められた戸外にS子のピンクの傘が見えるような気がして、しばらく園庭を見つめていた雪の日のことでした。

自己中心性が強く、自分本位な行動やものの考え方の多かった三才児が、一年間一緒に生活している間に、次第にまわりが見えるようになり、他を思いやる心が育ってきたりしているのを知る機会にめぐりあうと、何事につけ本当に目を細めなくなるような気持がします。三才児学級は小人数なので、その中でゆったりと自己を伸ばしながらも、折にふれて他を知る機会をもちました。集団の中の繋がりをつくりながらも、個を大切に育ててきました。そして今は、教師がなかだちをとりながら、友だち関係も

淡いながらも育ってきているこの年度の終りの時期です。四月からここに新入の四才児がまじって一学級を構成し、新しいスタートが切られますが、その中で子どもたちはお互い同士数々のことを学び、教えあって育っていくことと思います。そしてまた私にも、大人になってから忘れかけていた大切なことや、優しさや、新しい発見や、喜びびなど、いろいろなことを教えてくれるでしょうと楽しみながら、春の間近いこの頃なのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



くらしに顔を出した

小さな動き、大きな動き

泉本 晋一



三年間自宅の居間を仕事場とし、公私混同の生活をしていたとき、自分の子どもや彼らの友だち、近所の子どもたちが家に遊びに来て、じかにいろいろな子どもたちと接する機会があった。と言っても子どもたちの立場からみれば、父親が家にいるというだけで構えてしまうのではないかと思っていたが、はじめのうちは緊張気味の子どもたちも、一度つかえ棒がはずれてしまうと、再び雷が落ちるまでは、言いたい放題、やりたい放題であ

った。

そんな子どもたちの姿を見ていたせいか、建築設計という職業柄か定かでないが、子どもの動きの中から二つのことについて考えるきっかけを得ました。

一つは「手の動き」について。もう一つは「家の中の動き」についてです。手の動きについてはよく言われることですが、ナイフで鉛筆をうまく削れないことや、はきものをそろえるという「しつけ」にもつながることで



すが、家の中の動きの問題は、住宅に限らずいろいろな建物や住環境全般にわたるテーマと言えるかもしれません。

いろいろな場に身を置いて生活し、成長していく子どもたちの「動き」には、住環境を考える上でたいへん重要なテーマが隠されているような気がします。

### 手の動きによる美意識と機能

日常生活の中で、毎日繰り返し返されている単純な作業や動作にも、たいへん重要な意味をもっているものがたくさんあります。例えば「靴をそろえる」「スリッパをそろえる」ということなどは、礼儀作法としても当然のことと思われるかもしれませんが、そこにはそろえる、という「手の動き」が、そろっているという「美意識」と、はきやすいという「機能」を発生させています。この手の動きと美意識と機能の関係をくらしの中できると、親が子に教える「しつけ」ということにも置き換えることができます。そしてこの手の動きが日常生活の

中で、人と人、人と物、人と場との関係に与える影響は、非常に大きいと言えます。

しかしながら大家族から小家族へと社会状況が変化し、家族単位の構成人数が少なくなるにつれて、家族の一人ひとりが自己を主張しやすくなった現状では、親子へと伝わっていく手の動きも減りつつあるように思えます。

例えばすまいの構成を考えると、家族の構成人数がそのまま部屋数を決定し、一人ひとりに個室が用意され、それらを並べただけで出来上っている住宅では、子供部屋が「隔離部屋」になっている場合が多いようです。そこでは子どもの個性を尊重し、自立心を高め、プライバシーを守るという大義名分のために、相互干渉が許されず、親でさえ立入ることができない無法状態が続くこともしばしばです。

子ども部屋があることによって、隠れることや隠すことにつながってはいないでしょうか。誰にも見られないことが、手の動きを止めさせ、親と子の手の動きによる

コミュニケーションを妨げる一因になっているのではないでしょう。強引な言い方かもしれませんが、見える、あるいは見せることが、手の動きの大切さを知ることになると思います。

また手の動きによるコミュニケーションの減少は、生活の中にも見ることができません。インスタント食品が浸透し、母親の手の動きすなわち料理の手順を見ることがなくなってしまうました。それにより、子供たちが台所でできた母親との交流や、食事を通しての会話も減ってしまいました。また手の動きが減ったことにより、台所で使う道具が機械化され、腕をふるうことも少なくなりました。また板の心地良い響きも聞こえなくなろうとしています。

便利さや合理性を求め続け、手の動きが減ってしまっただけ、生活の中身が薄くなり存在感のない形だけが残りました。

ものをつくるときだけでなく、それを使うときも、そしてかたづけるときも、手の動きが美意識と機能をつく

り出します。かたづいた後の整理された状態は、スッキリとした美しさや心地良さを感じさせ、また使いやすさをも兼ね備えています。とくに共有の場や共有のものに対しては、それが重要な役割を担うことになります。

家庭だけでなく、幼稚園や学校、隣り近所など、子どもたちをとりまく住環境の中で、手の動きのもつ意味がもっと真剣に考えられなくてはならないと思います。どんなに小さな手の動きでも、それがくらしに与える影響力はとても大きいのです。

### 家の中の動き——おにごっこかくれんぼ

一軒の住宅の中にもいろいろな動きがあります。家族一人ひとりの動きからはじまり、家族全員の動きや来客に対する動き、あるいは一日単位の動き、一週間、一ヶ月、一年単位の動きなど、それらのとらえ方によって、すまいの構成—間取りが変化します。

必要な部屋がただ並んでいるだけで、生活の場で繰りひろげられるいろいろな動きに対応した立体的な間取り

の構成がなされていなければ、毎日の動きに無駄が出たり、使い勝手が悪くなるだけでなく、雰囲気や落ち着きのある場をつくることもむずかしくなります。

動きと場の構成を考える上で、最近ではあまりみかけなくなってしまう子どもの遊びの中で、「おにごっこ」と「かくれんぼ」の動きをとり入れた構成が、一つのヒントを与えてくれます。

「おにごっこ」は、目で見える相手の動きをとらえ、追いかけてかまえるまでのゲーム。「かくれんぼ」は、見えない相手を捜し出すという発見のおもしろさ、言い換えれば見え隠れのゲームといえるのではないでしょうか。この二つの遊びに共通しているのは、つかまえるまで、あるいは見つけ出すまで、オニは動き続けなければならぬという無限の展開がひろがることです。この連続的な動きの中で、自分と相手の位置を確認し、状況の変化に対応できた者だけが生き残れるわけです。

遊びを分析しすぎてしまいました。子どもの動きは、その子がどんな状況や場に置かれているかによって

大きく異なります。例えば行き止まりや全く隠れることができないところへ追い込まれてしまった場合、その子にとっては「死」を宣告されたも同然です。

家の中でも、接客などに対応する「表の動き」と、家族だけの「裏の動き」を考えることができます。表から裏へ、裏から表へとスムーズにつながる動きに遊びのエッセンスを加味すれば、いつまでも生き続けられる動きが約束されるのでしょうか。

くらしの中に顔を出す小さな動きも大きな動きも、各々が独立した動きではなく、そのとき、その場の変化に対応しながら動き続けるものです。これはその動きを起すものが人間であるからです。人の一生と同じような動き、その多感な時期の動きがどのようなものであったかによって、人生が変わります。いつまでも動き続けられるように、小さな動き、大きな動きをもう一度考え直してみたいと思います。

(龜建築デザイン)

子どもと環境

## 父とまんとみ幼稚園

近藤千恵子

大学時代には馬術を楽しんだと云う、動物好きな父は、長い闘病生活を経験していた。日課であった散歩の途中、西日の当る犬小屋や、陽の当たらない鶏舎の中の元気のない生き物をみるのは、父にとって辛い事らしく、「これでは病気になりますよ。」と、幼い私に話しかけてきたことを記憶している。

「飼育は良い飼育舎を作ることから始めよ。」が、父の持論であった。

そのような父が、幼稚園設立をおもいたったのだから、その設計にかける夢は大きかったのだらうと思う。

ことも達と保育者の健康がまもられる園舎、ことも達が仔犬のように走りまわれる安全な園庭、父のおぼろげな設計図は、すばらしいスタッフとの出会いによって実現されることになった。

まんとみ幼稚園は、昭和四十四年

設計・建築……林 雅子

家具遊具……垂見健三・万喜子

暖房……山越邦彦

施工 尾身工務店

によって完成した。

林雅子氏は、先年、女性として初の建築家賞を受賞されたが、病床にいた父は、当時を想い出して、受賞を当然の事と納得しながら、心からお祝いの気持ち言葉を言葉にしていた。父と同期で遙かにご健康で第一線で御活躍していらっしやった山越先生が、父より先に逝かれた事は、大変淋しく残念な事である。

## 「入口」と「管理棟」

幼稚園の敷地は、東京下町の亀戸と云う悪い環境にある。東側に公園が隣接しているのは救いだ、西側は民家、南北は道路で、北側正面道路は、南側道路より一、三米低いと云う、海拔ゼロ米地帯の特徴をもっている。設計者は、此の地形を見事に利用して、入口サブポーチを作った。北側道路に面した正面入口サブポーチから、階段を数段昇ると園庭がひらけ、更に数段昇ると管理棟に入れる。入口サブポーチに乗っかっているのが管理棟である。このレベル差は、交通量の多い道路から、幼稚園のプライバシーを作りだし、管理棟を全体を見渡すのにほどよい高さに置くのに役立っている。誠にすばらしい設計者の力量が光っている所だと思ふ。

サブポーチは幅二〇米奥行き五米の広さで、こども達の登園を快く受けいれ、園庭に、保育室にと導く。さりげないただずまいでありながら、毎朝の第一歩を踏み出す大切な役割を果している。お母さんをはっきりさせる

程の速さで「おはよう」もそこそこに園内に消えてゆくことももあるが、

「はやくお迎えきてね。」

「はい、一番にきますよ。」

と、おさまりの約束を交わすお母さんともどもいる。時刻がきて門を閉めると、雨天の日は、特に格好の外あそびのスペースとなって賑わう。階段の中央が石のすべり台になっていて、ゼットコースターごっこ、ロープクライミングごっこ、ワニごっこ、物をすべらせる遊び、などが繰り返される。年少のこどもには感覚的な遊びの喜びが、年長のこどもにはスリリングな冒険が試みられている。

## でこぼこに並んだ保育室と「屋外保育室」

敷地の西側に、五つの保育室がでこぼこに並んでいる。一列に整然と並べれば、園庭として遙かに広い空間を残すことができたろうに、此のムダとも思える発想が、設計者に感謝する二番目の場所である。

でこぼこ配置の結果、保育室には、屋外保育室と呼ぶ室内と同じ広さの石畳がついていて、そこに砂場と水場がある。砂や水と云う最高の遊びの素材が、保育室の延長と考えられる場所に用意されている事への感謝は、近年、高層住宅に住むことも達を多く迎えるようになって、一層深く感じている。屋外保育室と云うプランは、住宅が高層化することを予見して、こども達が戸外の生活に抵抗なく親しめるようにとの、設計者の配慮だったのかもしれない。常識的には、室内でもたれる事の多い製作活動も、屋外保育室に机を出したり、ゴザを敷いたりして続けられると、それは幼稚園中の者の目に触れて、遊びたい者を仲間にしてゆく、こゝは大変ひらかれた場所である。反面、建物のでこぼこ配置の結果うまれた、見通せない陰の部分もあって、こども達が好んで選ぶ遊び場、となっている。

### 保育室をつなぐ「小さなくぐり戸」

保育室は、ひとつひとつの独自性を保って運営する事

を期待された設計者であったが、何かの便利があるかもしれないと、建築の終りの段階で、保育室と洗面所が接している部分に、小さなくぐり戸が作られた。小さくしたのは、鉄の筋交いが入っていて、これ以上の大きさは作れない事情だったからである。

体をまげて小さなくぐり戸を通り抜けると、違う世界がひらけるように思えて、こゝは私の好きな場所のひとつである。此の思いはこどもにもあるようで、目的があつてすいすいと通過するこどもがいるかと思うと、くぐった所に立ち止って、新しくひらけた世界を隅からすみまで見まわして、再び自分のいた洗面所の方向に戻っていくこどもがいる。この小さなくぐり戸は、こどもの往き来と共に、こどもたちの情報が行き交う通路であつて、こんな風にご利用される事もある。

節分の鬼の役を演じようとしている年長のこども達は、管理棟に集って相談を始めた。こゝは、何かの目的、例えば誕生会の当番などで、保育者とこども達が活動する秘密の作戦場として利用される。

「こわくて、誰だかわからないような鬼になろう。」と、口々に云うことも達。自分の役を決め、イメージをはっきりさせながら、道具を使ったり、演出効果を考えたりして、自分の姿を第三者の目でみようとしている。保育者は、完成したイメージを与えるのではなく、時間をかけ、自由な気もちでこども達の創作を手伝う。各々の思いで出来あがった鬼達は、自信満々、くぐり戸狭しと保育室の弟妹の前に姿をみせてくれたのである。

小さなくぐり戸には、やはり、何か神秘的な力があるように思われる。

### 「床暖房」

十二月に入り、床暖房が始まると、幼稚園中が茶の間になったようなやわらかな空気で満たされる。毛布をかけてこたつを作り、カード遊びで朝のウォーミングアップをすることもたちや、洗面所のタオルを這いまわって、温水プールごっこを始めることも達もいる。

私は此の季節がめぐってくる度に、山越先生の純粋に

子ども達を愛した優しい笑顔を思い出して、感謝の気持ちでいっぱいになる。こども達が出入口の戸を開け放しにしても、輻射熱による暖房なので大丈夫、衣服を脱いで便所を使う小さいこども達をゆったりと受け止めてくれる。一年中上ばきを使わず、素足が一番気分のよい事を、こども達はよく知っているのである。家庭に近い味わいをもった幼稚園にしたい、と云う私の願いは、山越先生の床暖房によって叶えられたと云える。

気品あるデザインの椅子・机・ロッカーなどは、天童木工の特別注文品として、入念に造られているのだから。毎日休む事なく、こども達の命ずるまゝに、基地になったり、乗り物になったり、こどもと一体となってあそんでいる。安心して、満足して使える物と共にいる事の幸わせは、何者にも替えられない喜びだと思ふ。

誕生から十五年を経過し、延べ一千人程のこども達や保育者が暮らした幼稚園に、「まだまだ元気です、故障しないでくれ」とお願いしたい。

(東京・まんとみ幼稚園)

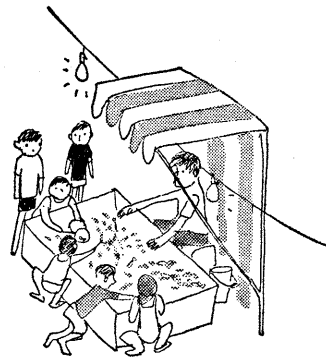
## 児童公園・遊園をめぐって

植田 敦子

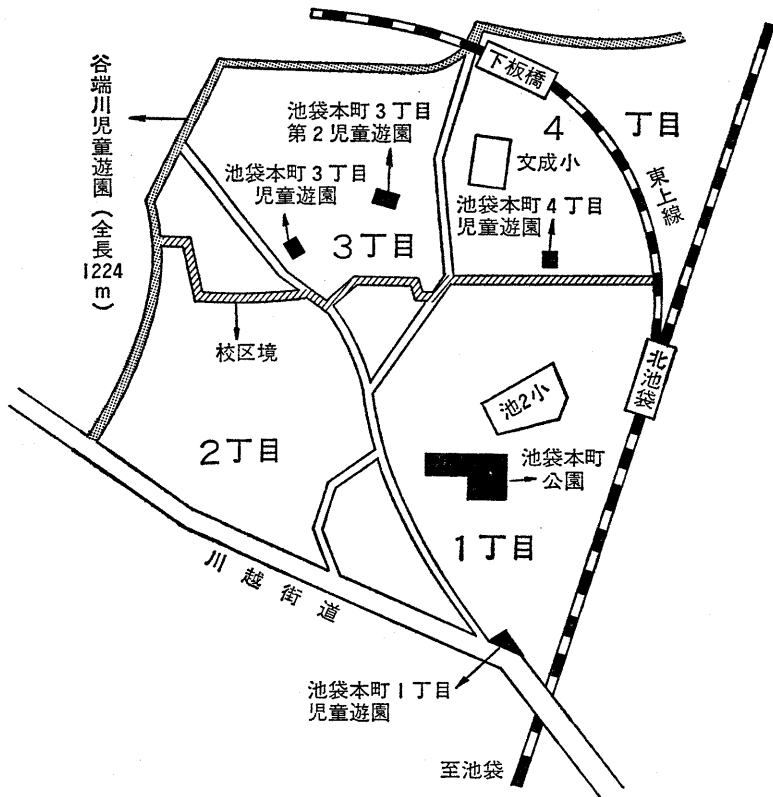
昭和三十年頃から始まる高度経済成長は、人間をとり巻く環境を激変させた。現代の都市——それは機能重視に偏り、人間性を無視したものである。全てを秩序の中に組み込もうとした結果、曖昧な空間は次々と破棄され、当然、遊び空間も減少してしまった。ところで、子どもには遊びが必要であるということは誰もが認めるところだが、肝腎の遊び空間に関心を持つ大人は少ないの

ではないだろうか。子どもの遊び場＝児童公園という考えが定着し、そのことを当り前に受け入れてしまっている。が、あのような、いかにも遊び場然としたものはたして子どもを魅了する存在であるかどうか、非常に疑問に思うところである。

私は、昭和五十八年の六月から十月にかけて、公園の利用実態の調査を行なった。その場合、アンケート法と





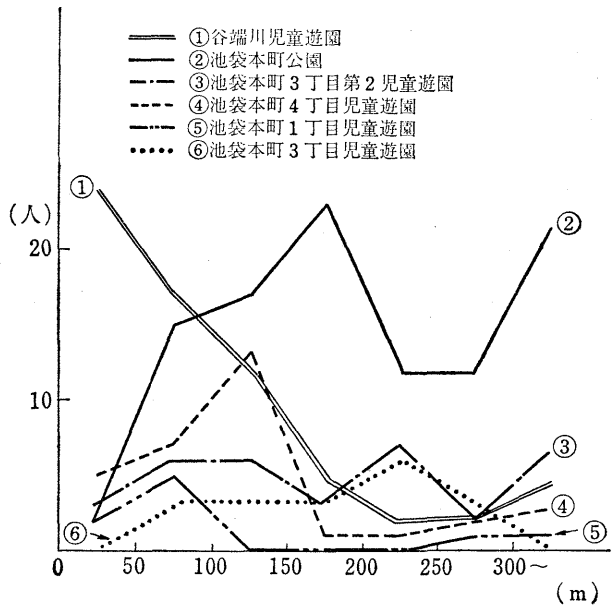


注：谷端川児童遊園、川越街道、線路は、他校区との境でもある。ただし下板橋、北池袋間の東上線線路は省く。

観察法をとった。一番目の方法として、東京都豊島区池袋本町一丁目から四丁目の地域（地図参照）にある二つの小学校（文成小学校、池袋第二小学校）の一年から六年まで、各一クラスの児童にアンケートを依頼し、頻繁に遊びに行く公園名を書いてもらった。尚、公園を遊び場として利用しない者（対象者の約28%）は書かなくてもいいことにした。豊島区は、武蔵野台地の末端に位置し、かつての近郊農村地域から、関東大震災、第二次世界大戦を経て、急速に市街化が進んだ地域である。現在では、ドーナツ化

現象により人口は減少しているというものの、副都心池袋をかかえ、依然人口高密度地域であり、一平方キロの中に二〇八四三人（五十八年五月一日現在）という数値は、東京都第二位である。そのような状況下、区の北部を占める池袋本町は、住宅が密集し、オープンスペースに恵まれていない。

アンケートの結果、子ども達が利用する公園は、地域の六つの公園のいずれかに集中し、文成小学校、池袋第二小学校共に、明確には地域内で遊ぶように指導していかないにもかかわらず、外の地域に及ぶものはほとんどないことがわかった。これは、校区境、線路、交通量の激しい道路が、公園利用を規制する大きな要因であるためと考えられる。校区境を越えて他校のテリトリーである公園に行くことは勇気がいるし、踏切、自動車の存在も足を運びにくくする。公園を設計する側は、こうした点を考慮し、適当な場所に設置してもらいたい。都市開発にあたっては、公園を中心に据え、住宅街と、車の通らない道路で結ぶことも一案だろう。



また、得られた資料から、六つの公園の利用者数を、自宅から公園までの距離毎にまとめてみたものが右のグラフである。②の池袋本町公園の利用者数が飛び抜けていることは、面積の広さ、及び公園内を、芝生、運動広場、砂場（中に遊具が存在）の三つのエリアに区切り、

遊び空間に多様性を持たせたことに帰因すると思われる。ここで、明らかに他の公園とは異なる形を示している谷端川児童遊園に注目してみよう。公園からの距離が大きくなる程、人数が減っていく傾向にある。(300m以上の人数は無視する)この公園は、当地域の西・北部をぐるりと流れている谷端川を暗きよ化し、遊び場として整えたもので、前掲の地図でもわかるように、細長く道路状に続いている。こうした形態上の特色から考えれば、他の公園とは異なる傾向を示したことも理解できるのではないだろうか。つまり、この公園は、家のすぐそばの車の通らない道路として利用されているのである。藤本浩之輔は、『子どもの遊び空間』(NHKブックス、一九七〇)の中で、道路というものは、本来家と地続きの生活空間としての機能を持つものである。また、公園と違ってわざわざそこまで遊びに行くという性質の場所ではない、と述べている。したがって遠くから遊びに来る子どもは少なく、0-50mの距離に人数の集中がみられたこともうなずける。このように、公園らしからぬ道路状

の空間が、近くの子ども達によって利用されているという事実は、私達に、遊び空間としての道路の価値を、改めて問いかけてるように思う。交通事情の悪化により、道路での遊びは失われつつあるが、かつては「石けり」や「グリコ・バイナップル・チョコレート」などに興ずる子ども姿がたくさん見られたものだ。家のすぐそばにある、ということ、最もみじかな遊び空間であったに違いない。

さらに、もう少し詳しく谷端川児童遊園の利用状況を把握するために、二番目の方法として、公園に赴き、遊び行動の観察を行なった。(児童対象)この公園の特殊性を表わしていると思われる点を、二つばかり述べてみよう。

まず第一に、「とばしめん」「古道具を用いた遊び」が見られたことである。「とばしめん」は、コンクリートの縁の上にメンコを載せ、ゴム草履ではたいてどこまで飛ばすことができるか、を競う賭的な遊びである。メン

コを飛ばすための広いスペースが前面に開けていること、しかも台の上が平担で材質が硬いことなど、遊びが展開する条件を満たしていたと言えよう。が、それだけではない。私が当地域の遊び空間全般を眺めた限りでは、メンコは、公の開かれた場よりもガレージとか路地などの私的な場で行なわれているようであった。賭の持つ性質―閉鎖性、背日性、子どもにも無意識的にそのような場所を選択させているのかもしれない。谷端川児童遊園は、公園として開かれた場には違いないのだが、地域の周辺に位置することで中央から疎外された場と言えること、さらに、両側に家が連なっていることで、断面は型となり、路地と似た機能を持っていることなどが、賭的遊びを促していると考えられる。

後者の捨てられた古道具を用いた遊びは、大変興味深いものであった。マットの上でのプロレスごっこ、枕ぶつけ。そのうち、グループの一人がマットをひきずっていった、近くに設置されている土管の上に載せ、マットに仰むけに寝たまま、土管の曲面をすべり降りするという

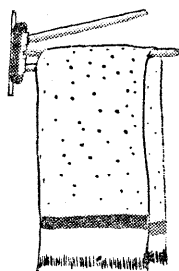
遊びを始めた。数回繰り返すと、今度はマットを下に敷いておき、それにめがけて土管の上から飛び降りる。また、子ども達にとって薄暗い土管の中は、恰好の住み家であり、安息の時を過ごす。他の五つの公園は、少なくとも遊び場として整えられており、ゴミを集めることはあっても、決して捨てる場所ではなかった。当公園に古道具が捨てられていたことから、地域住民が、谷端川児童遊園を公園として意識していない、公園というイメージからはおよそかけ離れたものとして映っているのではないかと考えてしまう。が、子ども達が、捨てられた物を使って遊びを工夫している様子を見ると、その公園らしからぬアナキーな面が、かえって受け入れられているようであり、混沌としたものの中から何かを生みだしていく過程こそ遊びなのだと思感せざるを得なかった。

もう一つは、同じ公園の中でもある箇所はよく利用されていたが、ある箇所はそれ程でもないなど、場所による利用状況の違いが見られたことである。これは、公園

の内容（遊具、アナーキー性等）が場所によって異なるためであるが、道路状の公園ということから考えると、公園の両側の状況も大いに影響していると思われる。例えば、向かいに国鉄アパートがある箇所では、アパートに住む子どもが公園を利用する。アパートの敷地内で遊んだ後、公園に来て遊具で遊び、再びアパート内へ戻って行くなど、アパートと公園を交互に利用している姿が認められた。この子ども達にとって、遊び場は、アパート内に限定されず公園にまで広がっているのである。また、公園とこれに突き当たる道路の交差領域には付近の子ども達が集まり、T字型に二つを結合させて遊び空間をとらえていた。

児童公園が、どのように子ども達に利用されているかを見るために、地域の六つの公園を調査したのだが、谷端川児童遊園はその特殊性ゆえに、子どもにとって非常に大切な遊び空間を示唆してくれた。道路空間、路地などの凹型空間、アナーキーな空間がそれであるが、これらは公園においてはもちろん、現代の都市には存在し難

い空間である。都市を美しく衛生的に整え、開発していくことは、一方で、子ども達の遊びを締め出しているのではないだろうか。その代償に、遊具をそろえた児童公園をつくったとしても、子どもは満足しないだろう。公園を含めて、都市にどれだけ子ども達を許容しうる空間があるか、その時々で選択できる多様な空間が残されているかが、遊びを決定づけることになる。



## 階段のある園舎と子ども

黒田成子

「せんせい、こんどのようちえんは光っているよ！」

これは五年前の秋、改築された新しいわが園舎に子どもたちが初めて入ってきた時の歓声だった。旧園舎は小じんまりとした木造の建物で、それなりの良さはあった。しかし、四十五年の古さで破損している所もかなりあったから、それにくらべ新園舎は子どもの目にたしかに輝いてみえたのだろう。特に目をひくような明るい色

彩があつたわけではなく、むしろ白一色の平凡な、鉄筋の建て物であつた。それを「光っている……」と叫んだ子どものことばに私たちも思わず共感したのをおぼえている。

### 自由な生活の場として

設計をして下さった吉岡亮介氏は現場の私達と何度も

話し合って下さった。私達は堅い壁などでしきられた狭い保育室でなく、子どもたちが自由に生活の場をくりひろげていかれるようなオープン形の形態を夢見ていた。日常の保育のありさまをあれこれ話すとY氏はじっと聴いていて「それでは二階にしようでしよう」と提案。

園全体の敷地面積がわずか一四〇坪しかない所でそのよゆうな遊び中心の保育を期待するなら一階だけではスペースがあまりにも不足のようであった。

二階説には先生方は皆賛成だったが、反対したのは園長の私人。穏やかなY氏に「どうして二階では適当でないのでしょうか」と尋ねられても「子どもがすぐ庭に出られないから」「眼がとどかない」「あぶないから」位の理由しかあげられなかった。

よく考えてみると三十年前に学び、当時は新説としてとびつき、今だに自分の中にしっかりと巣くっている固定概念——園舎はこういうものだというものがじやまを置いていたらしい。私は子どもたちの姿をそこにおいて思いめぐらしてみた。そしてよく考えたすえ、二階でもい

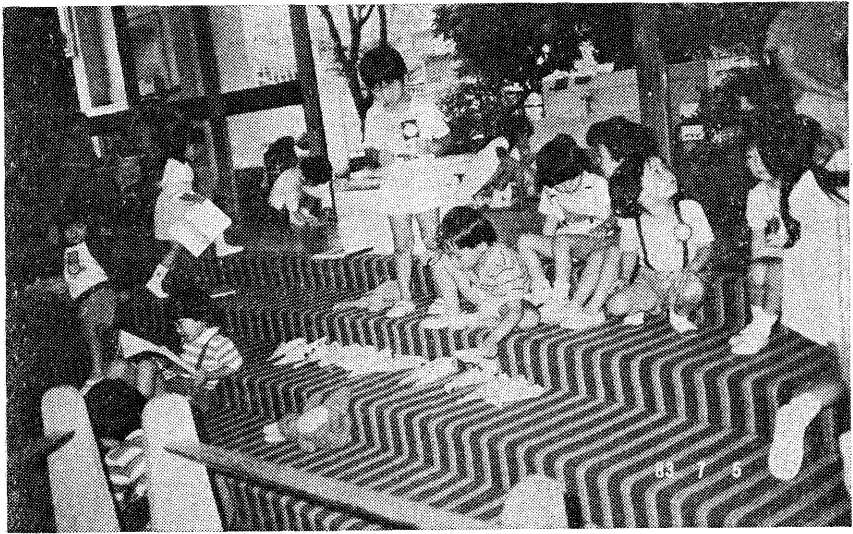
いではないかという結論に達した。子どもたちは昔の子どもではなく今の子どもだ。生活の仕方も変っている。むしろあがり下りはたのしいかもしれない。そこでいきいきとした遊びも出てくるかもしれないと思ったわけである。そしてようやく発想の転換をすることができた。

その後も何度か設計図が画きかえられ、種々な問題をのりこえ、落成となったのである。この五年間、子どもたちは保育日の朝は走って飛びこんでくる。そして文字通り喜々としてこの小さい園舎を自分たちの生活のすまいとして日々を生きている。

### じゅうたん階段

二階に通じる階段のことはさておき、一階のホールの入口に「じゅうたんかいだん」と言っているところがあるが、子どもたちはここで遊ぶのが大好きである。

これは外から入ってきた所にホールの幅いっぱいひろがっているカーブしたステップのことである。わずかに四段位のステップだが、軟い栗色と茶色の縞のじゅうた



んが敷いてあるところから「じゅうたん階段」と言われるようになった。

もともとのホールの床に段差がついたのは建築基準法により、北側斜線の制度があった日照権の事のためと、七メートル五十センチの高さ制限をクリヤーするために、ホールの床を約七十センチほど下げなければならぬことから、やむなく実施したものであった。設計者がこれを積極的に利用して保育の面で生かせるものとなった。

じゅうたん階段と言えば入園間もなく、此処で皆の遊びをじっと見ていたN子の事が思い出される。ある日のこと、先生がやさしく誘いかけ、やっとN子は遊びに入ったように見えた。しかし、しばらくすると、いつの間にか彼女は又じゅうたん階段の隅のところへもどっていた。そして降園時までずっとここに坐っていた。N子が自から「入れて」と小さい声で言えるようになるまで何週間もかかったが、じゅうたん階段の隅っこはN子にとっては又とない安住の場所だった。



ある時は子どもたちがままごとをするため道具をせつせつともってきたり、ふとんを運んできたたりした。階段の段差をつかってお家ごっこが始まる。それは平板な床や畳の上とは又異った感触。そして一段と複雑で面白いものになったりした。

朝のゆっくりとした自由な遊びが終ると子ども達はマラソンに行く。マラソンといっても近所の小学校を一回り走ってくる程度のことである。その時、子どもたちはぬいだ上着や下着をじゅうたん階段のところへたたんでおいておく。五〇〇メートル余りの短いコースだが先になり、後になりして走りながら、息をはずませ、上気した顔で戻ってくる。じゅうたん階段は次々に花が咲いたように賑かになり、子どもたちの熱気が溢れる。時にはパンツまで脱いでしまった四歳児が、「どっちがおもてなの——？」と困っていると五歳の女児が、「どれ、見てあげる」と手に取り、真剣なまなざしでしらべたりする、ほゝえましい光景も見られる。(写真は子どもたちが並んで紙飛行機をとばしている所)

## 遊び場としての階段

次に一階から二階へあがる階段のことを記したいと思う。従来私は階段といえ一階と二階を結ぶ通路位にしか思っていなかった。わが園舎のホールの両側にある階段には木製のすべり台がはめこんであり、子どもたちは階段を駆け上がったたり、滑り下りたりをくり返すことのできる大好きな活動の場となった。階段はホールを見下す展望台ともなる。又子どもたちは、階段の途中から長いひもを垂らし、一階でつくった魚をつりあげて遊んだり、実に面白い遊びを創り出している。

新築後間もない保護者会の時、母親につれられて来園した二歳未満の女児が、いつの間にか階段の半ばまで登っていて驚いた事があった。それほど、この階段は単に傾斜がゆるいだけでなく、段の高さが殊に低く、又段のふみづらがかかり広くしてあり、小さい子どもでも段の途中で坐り込んで遊べるほどのゆとりがあった。

三学期の事であった。年長組では独楽をまわせる子ど

もは三十九名中、四、六名にすぎなかった。それがまわせる人の輪がひろがり、ついにクラスの「独楽まわし大会」をする事となった。年長組のK先生の日誌にはこのように記されている。

へ……このこま大会は個人戦からグループで何人まわせるかというものになっていった。今まで「わたしはまわせない」「まわさない」と言っていた子どもたちも友だちに手とり、足とり教えられ、とうとうまわせるようになった子どもが何人もいた。自分がまわせるようになる。と次の友だちに教えるという輪がひろがっていった。仲間同志で励まし合い、互に「出来た！」と喜び合う姿は何か立派に見えた。特に子どもが教えてあげたりすると、まわった時にはまわせた子どもも、教えた子どもも共にはしゃいで喜んでいた。

独楽まわしはただまわすだけでなく、階段をおろしたり、すべり台ですべらせたり、ものの上で廻したり、手にのせたり、ケープルカーをしたりと色々なやり方を変えてたのしんだ。……

三学期後半の階段はまわしながらこまを下してくる子どもや、グループで組んで遊ぶ子ども等で満員の盛況を見せていた。気がついてみると年長組の三学期の目標「じっくりとりくめるようになる」はいつのまにか一人一人のペースで身についていた。

### 園舎の住人として

はじめあんなに「二階」に反対だった私は共に働く先生方や、冒険好きの子やそれぞれの個性をもつ子ども達と楽しく暮しながらいつしか保育を水平的思考から立体的思考へと転換する事を学んでいたのである。紙上では園舎の一部しか紹介できなかったが、ここで生きる子どもも、保育者も、家庭の人たちも皆共に自分なりの自立を見出し、そしてたくましくこの住まいをフルに生かして育ち合っている。そしてほしいと思っている此の頃である。

(武蔵野相愛幼稚園)

## 幼児施設の計画視点

小川 信子

### ☆はじめに

幼児のための施設について、関心を持つようになったのは、およそ三十余年前のことになります。大学の卒業論文研究のために、その当時の幼稚園と保育所を数ヶ所、見学をして調査をおこないました。その中の一施設がお茶の水女子大学の附属幼稚園でした。多分その時の園長先生は及川先生でいらしたと記憶しておりますが、その折の先生のお話しを含めて最も印象深く、そして私が今日まで幼児施設を研究し計画する時の原点になっています。

さらに、幼児の教育について目を開かせて下さった先

生の一人として周郷博先生の教えも忘れることができません。"幼児を教育することは、大人の基準で枠をきめずに子どもの可能性を信じて見守ることが大切である"というようなことをおっしゃいました。そして従来までの一斉に行動をさせる保育方法とは違う子どもの個性を伸ばせるような教育をしなければならないということでした。

### ☆生活と環境のかかわり

その時のお茶の水女子大学附属幼稚園の保育方法は、子どもたちの動きが他の幼稚園と異っていました。それは、保育室の中できわめて自由に子どもたちが行動していたことであり、その行為の内容は多様でした。或る子どもたちは、積木遊びをして共同作業をしているかと思えば、ある子どもは絵を描いていた、又はごっこ遊びに夢中になっていました。保育室が色々な性格を持っているかに見えたのでした。それ以来、子どものための施設は、小学校の教室のように机とイスを並べたものでは、十分な保育ができないと思うようになりました。

施設計画をおこなう時に、最初にその幼稚園の教育内

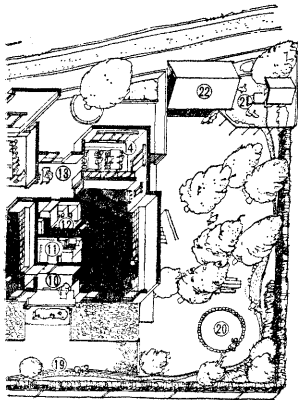
容を理解することです。さらに、その内容をどのような方法で運営しているのかを検討します。その上で注意しなければならぬのは、子どもと先生とのかかわり合いを良く知ることでしょう。環境を計画することは、単に物理的な建物を作るのではなく、その中で行われる生活にふさわしい条件作りをすることでしょう。そのためには次の点を検討することからはじめます。

(1) 子どもの個人的な行為を疎外しないように配慮をする。

(2) 小グループおよび大グループなどグループでおこなう行為の場を確保する。

(3) 保育機能に適した空間を用意する。たとえば、絵を描くために十分な道具を設置した場所、遊戯ができる広さのある空間など、静かに本が読める図書室など、を別々に考える。

(4) 従来までのように保育室の中で多様な行為をおこなっていた状態を再検討して(3)の機能的な考え方をした時の空間の計画を考



える。

(5) 各々機能的な空間を計画した上で、それらを融合的につなげて子どもたちの出合いの場所をつくる。

(6) 衛生関係の空間と保育空間との関連をはかる。

(7) 保育室と外部空間との関係を考えて、行動が拡がるようにする。

(8) 上下足の履きかえ場所を玄関にまとめる。直接、保育室やテラスから入れない。保育室に直接入るような登園方法の場合には、保育室に出入口のためのコーナ－を計画する。

### ☆T施設の空間計画例

(設計小川信子+小川建築工房) 一九七七年四月開園(定員障

害児も含んで九〇余名)

。生活行為別の空間計画

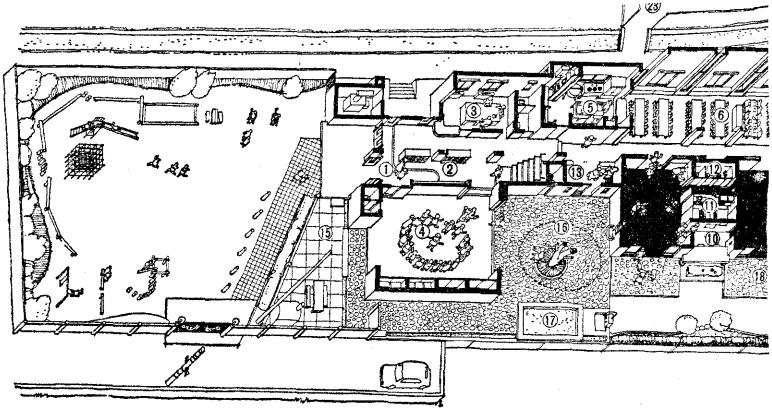
年令別の保育室(七、八、九)

が園でのひろがりのある生活の拠点になり、この部屋を中心に、食事室(一)、読書室(一四)、遊戯室(四)、たまり場(二三)などがあり

ます。保育室と遊戯室は机やいすは入れず、床を十分に生かして、保育室は静かな、遊戯室は集団的な、また活発な行為をおこなう場所となります。食事室（制作室を兼ねる）と図書室は机といすを入れて、机を使った行為ができるように計画をしました。絵画、共同制作などは、食事室で開放された空間として使います。静かで落ち着いた雰囲気が必要な時は読書室を利用します。

。空間の相互交流

保育室は相互につながり、また各保育室は食堂とつながり、空間に独立性と連続性をもたせ、子どもの心に緊張と開放をあたえ、秩序と自由とのバランスある社会生活の中で、より正しい個性の成長を期待しました。また遊戯室と中庭（一六）、保育室とテラス（一八）および前



内部の行動を規制しないよう十分な配慮が必要です。

（日本女子大学）

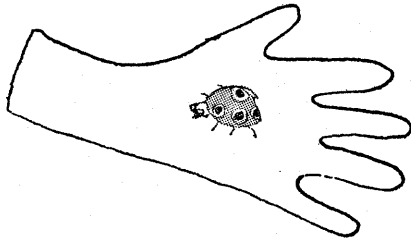
庭、読書室と裏庭など、それぞれの内部空間は、それにふさわしい外部空間とつながります。

。地域社会への開放

読書室を、児童図書室として地域へ開放できるように、直接入れの入口（二二）を取り、同時に鳥小屋（二二）や裏庭も開放します。やがて卒園した子どもたちが図書室にあつまって、コミュニティ活動の中心になれるようにとの願いも込めて計画をしました。

環境は室内・外を含めて計画をしてはじめて整備されたものになります。幼児施設の計画は、その施設でおこなわれる保育がよりよくおこなわれるための物理的な空間作りでもあります。空間が、

## 近代短歌に現われた子ども（十八）



大塚 雅彦

### (39) 中野菊夫

中野菊夫は明治四十四年、東京・渋谷に生まれた。生家は花づくりをしていた。国士館中学を経て昭和十一年多摩美術学校図案科を卒業、母校国士館で図画教師をし、図案家となる。美校時代に東洋美学の金原省吾や日本画の平福百穂、図案の杉浦非水等の指導を受けたという。一時、美術団体に加わったり、師の美術評論家大隅為三の助手として中国に渡ったりした。戦時中は陸軍参謀本部の海外宣伝機関である東方社に編集部の一員として勤めた。戦後は文筆家として活躍し、今日に至っている（その経歴については東京新聞編『私の人生劇場』へ昭43・3所収の自叙的な文章に、面白く描かれている）。

彼は中学在学中の昭和二年、啄木を読んで惹かれ、作歌を始めた。茂吉の作品にも親しんだ。在学中から小説誌を出していたり、特定の師に就くことなく、ほとんど独学で歌風を築いたという。昭和七年鈴木北溪らと「短歌街」を創刊したが、同九年別れて「七葉樹」を創刊した。昭和十八年の歌誌総合で他誌と合併し「八束穂」を創刊編集したが、四号で休刊した。昭和十年代から戦中にかけて明治初期短歌史——特に桂湖村・福本日南・陸羽南等のいわゆる「日本派」の人々の研究をし、日刊大民新聞に天田愚庵研究を連載したり、更に与謝野鉄幹にたどりつき、後に鉄幹に関するすぐれた研究を発表するようになる。戦後の昭和廿一年、渡辺順三を助けて「人民短歌」を編集。また、翌廿二年には「新歌人集団」の結成にも参加した。のち「人民短歌」「新日本歌人」と改題)の公式主義にあき足らず、これを離れる。昭和廿六年、歌誌「樹木」を創刊主宰し、今日に至っている。また、彼の人柄からか、日本歌人クラブの結成に寄与したり、日本歌人協会の常任理事を長くしたり、歌壇の多く

の企画や会合で常に世話役のような立場を引受けたりする。全国のハンセン氏病(癩)療養所を行脚して患者の歌人たちの指導をしたり、彼等の歌集を編んだり、被爆関係者や職場の勤労者の短歌を指導したり等のヒューマンな感情にもとづく行動や、死刑囚救援運動をする等の政治・社会への関心、正義感から出る文学活動・社会活動等も多く、誠実な歌人である。歌集は初期の『丹青』(昭18)、『幼子』(昭24)、『風の日』(昭29)等から最近の『鷹とリス』(昭52)、『前夜』(昭53)、『集団』、『朱雀抄』(共に昭55)、『冬の魚』(昭56)等に至るまで八冊ある。合同歌集『新選五人』(昭26)や自選歌集『水色の皿』もあり、また前述の如く療養歌集『試歩路』(昭29)『陸の中の島』(昭31)の編さん、選歌等の業績も見逃せない。研究書として『太田水穂の秀歌』(昭51)、『わが愛する歌人』第四集(合著、昭47)等があり、自叙伝的な前述の『私の人生劇場』(合著、昭43)もある。啓蒙・入門書的なものとしては『現代短歌の世界——作歌と技法』(合著、昭51)、『短歌のこころ』(合著、昭54)等

がある。エッセイ、隨筆等のすぐれた文章も多い。

中野の作風は、広い意味のリアリズムを信奉しているだけに、率直で明快であり、晦渋でなく、虚飾や誇張や冗舌を排し、ことばの凝縮と單純化を心掛け、「地味、平明、単彩をえらぶゆき方」であり、また、都会人風な良識や清潔さに溢れ、批判精神に富み、卑俗や通俗を嫌い、純度の高い抒情がある（短歌新聞社編『評論集・現代歌人百人』〈昭37・11〉所収、拙稿「中野菊夫論」参照）。

①妻が植ゑし大切な葱をぬきてきぬこの幼子らかくて  
育ちゆけ

②みどり子はものを言はねば抱き上げて日に向けやれ  
ば目を細くせり

③妻あてに送りくる小包ときにあり食品なれば子も声  
をあぐ

④死にし子をみづから土に葬りて引きあげし君とも今  
日めぐり逢ふ

⑤目の清き幼子と思ふゆきすぎてふりむきたきをふり

むかず来ぬ

⑥銀色に光れる芽花声立てず瀬少年ら棒とびしをり  
⑦鼻緒問屋の鼻緒のなかにうづもれて膝を正しく少年  
坐る

①は歌集『幼子』の冒頭「幼子」一連の中にある。この歌集は昭和廿一年末から廿二年半ばまでの作品を収めているから、この歌も終戦直後の作で、製作背景がわかる。食料も乏しい時代で、夫人がすこしでも食料の足しにしようと、庭の隅にでも葱を植えたのだろう。ところが腕白な幼児はいたずらしてそれを引抜いてしまった。作者は苦笑しながらも、子どもの元気をたのしく思い、逞しい成長を切望しているのだ。下句が作者の人柄や父情をよく現わしている。この歌の前に「友の子とわが子と分けて一本のミルク飲むさまを妻と見ほるる」があるが、この歌にも当時の世相と、子どもたちの動作をむしろたのしく思っている作者夫妻の心情がにじんでいる。②もやはり『幼子』の「日日」一連にある陽の下に佇つた或る父子像という感じで、清純であたたか



い作品である。「みどり子が日にまむかひて目を細めみつめてあるよ日に向けてをく」という歌が続いている。

③も同書「身邊」一連の中にある。「妻あてに」というから、夫人の実家あたりからでも送って来たのだろうか？それが食品とわかって喚声をあげる子ども。これと似た経験は、戦後の物資乏しかった時代に子どもを育てた者は、みな持っている。情景の髣髴とするような歌である。同じく食料をめぐる親子像を示すものに、歌集『風の日』所収の「押し麦を袋より器にうつしをり幼子もわれも沈黙のまま」という作品があり、すこし歌の内容の雰囲気が違うが、これはこれでまた、巧みな叙述で情景がよく現われている。「押し麦」など今は食べる人も少ないだろうが、私の田舎の小学校時代には、級友たちの多くが弁当にこの「押し麦」の飯を持って来たものである。④は『風の日』の始めの方にある。この「君」というのは女性のようだ。敗戦の引揚げ行には、この歌の内容のような悲劇が少なくなかった。藤原ていの『流れる星は生きている』は、主婦の満州からの脱出

引揚げの体験記録であり、その苦難のさまが綴られているが、かくいう筆者も捕虜生活から復員の折に満州の野を歩き続け、一緒になった女性からこの種の悲痛な体験を聞いた経験がある（安田武編『日本人への遺書』へ昭42・8）所収、拙稿「虚しき暦——わが歌日記」。作者は外地から引き揚げてきた古いなじみの女性に逢い、この悲惨な体験をきき、胸をうたれているのであろう。⑤は歌集『新選五人』の「母子寮」一連にある。一連を読むと、作者は幼児を連れて母子寮の近くを通ったらしい。すると、たまたま目の清い幼子を見かけた。「可愛いいな」と思い、もう一度振り向いてみたいと考えたが、それを抑えて通り過ぎて来た、というのだ。下句はなかなか複雑な心境である。父である自分と一緒に歩いているわが子と較べて、父の居ない母子寮の子どもの哀れさを想いやったのであろうか？⑥も同書の「もぢずりの花」一連にある。前述の如く作者は屢々癩園を訪れ、癩を病む歌人たちを指導し、激励しているのであるが、この歌もそんな折の作である。茅花が銀色に光っている

庭で、癩園の少年たちが声も立てないで棒とびをしている光景に、胸うたれているのであろう。「少年ら松の林に遊べどもふりむくとせずみな癩を病む」という歌が続いている。⑦は歌集『前夜』の「駒形あたり」一連にある。冬の東京・下町の大川端あたりを作者は歩いていた。たまたま鼻緒問屋の前を通ると、職場で鼻緒に埋もれるようにきちんと膝を正して少年が坐っている、というのである。この店の徒弟奉公している少年店員であろうか？少年を愛する作者のヒーローマンな心情が、読者につたわってくる。「膝を正しく少年坐る」という一語が、真面目そうなこの少年の健気さと、作者の好みをよく滲ませている。安池敏郎氏はこの下旬の把握から、「作者自身の端正な性格が感じられる」と述べている(加藤将之編『戦後歌人論——現代短歌二十人』〈昭50・4〉所収、安池「中野菊夫私論」)。

(40) 山本友一

山本友一は明治四十三年、福島県信夫郡清水村(現福

島市御山)に生まれた。農業の父は間もなく満鉄に入社したため、母と共に渡満した。小学校途中より帰国、県立福島中学を卒業。上京し出版社に勤めた後、昭和六年渡満、以後終戦まで軍用鉄道建設に従事する。この間、再度にわたり応召。終戦直後、国共内戦の兵火のもとで強制労働などさせられ、苦難を管めた後、引揚げた。その後、東京で排水管工事業、真田紐製造業や印刷業等を営んだが、経営のための業苦をつぶさに経験する。昭和卅二年角川書店に職を得、宣伝課長になったが、四十八年に同社を去った。のち九芸出版社を興し、こんにちに至っている。

友一は中野菊夫と同様に、中学時代に啄木を読んで作歌を始め、友人らと同人誌を創刊し、さかんに詩文をつくり、また、「福島中学校短歌会」を結成して短歌に熱中したという。中卒後「短歌雑誌」に投稿し、その機縁で昭和四年「国民文学」に入社し、松村英一に長く師事し、同誌の同人となる。戦後は、宮柵二・近藤芳美・大野誠夫・中野菊夫ら今迄述べて来た人達と共に「新歌人

集団」に属して活躍した。昭和廿八年、香川進らと「地中海」を創刊し、中心の一人として今日に至っている。

歌集は『北窓』（昭16）、『布雲』（昭25）、『黄衣抄』（昭28）、『萬春』（昭33）、『九歌』（昭42）、『長謡』（昭49）、

『日の充実』『続日の充実』（昭57）の八冊があり、最後の二冊は現代歌人協会賞を受けた。その他、前述の合著歌集『新選五人』（昭26）には山本も名を連ねているし、また自選歌集『百牛志』（昭46）もある。編著として『私の短歌入門』等もある。

山本の歌の特色は「国民文学」社の方針ともいえる現実的歌風であり、生活詠が多く、記録性も強い。茂吉の影響も強く受けているだけに着実で、自我の主張がはっきりしており、強靱で、足の地についた剛直で明快なうたいぶりであり、倫理性にも富んでいる。軽佻浮華を排し、生活者の抒情を基調とする彼の信念と、東北人らしい質朴な性格や、幼少時から中国大陸で刻苦し堪え抜いた生活体験とが、渾然として一体を為しているのではありませんか。リズムは古典的でダイナミックな抒情に富む

が、一面ではやや古めかしい詠歌と感じさせる場合もあるようだ。

① 著がへするときのおひだも股くぐりあそぶ吾が子に  
ただなごむべし

② 子らよりも早く目覚めてさ蠅らを追ひゐる今朝はは  
や兵ならず

③ ひとつ寝にねに入る子らのその一人服をたたみて枕  
くあはれなり

④ 子のむつき取りかへながらあはれ言ふこよひふたり  
にて気づまりはなし

⑤ 所持金を首より下げて雨に立つ悲しさも早く子らは  
忘れむ

⑥ 妻子らがかたへに寝てしづかなるわが夜となりぬ  
小机のまへ

⑦ 世を遠き思ひにも似て孫の爪剪りをれば飛ぶ眉びき  
の爪

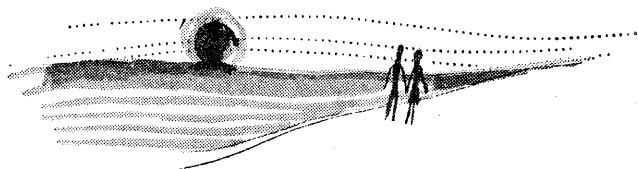
①は歌集『北窓』より抄出。「歳晚貧酒」の一連の中にある。昭和十五年作で、この頃作者一家は満州の吟爾

浜市内に住んでいた。この「子」は三才くらいになっていた長男一良だろう。多忙で外出がちの父親が帰って来ると、着換えしようとする束の間でも、その父親の股くぐりをして遊ぶ幼子に、たわいなく和む気持が微笑ましく詠出されている。②から⑤までは歌集『布雲』より抄いた。②は「復員」一連の冒頭の歌だ。昭和十八年作で、この年七月作者は召集解除になり、家に帰って復職した。朝目がさめて蠅（さ蠅）の「さ」は接頭語を追っている自分は、たしかにもう兵隊ではないのだと確認する安らぎは、兵役の体験のある筆者にも実感としてわかる。③は「傷心歌」一連にある。「ひとつ寝」は同じ床に一緒に寝ることで、「浅春」の一連の中にも「子ら三人ひとつ寝にぬる夜は冴ゆれ冬も去なむとわれら語らふ」がある。「枕く」はまくと読ませ、①枕とする④抱寝する、等の意味だが、この歌の場合どちらだろうか？子ども達が同じ布団に寝るのだから、後者の意味か？服を寝押しするようにもとれるので、その場合なら前者か？何人か居る子どもたちの中の一人だけがそんな動

作することに、作者はあわれを感じたのだろう。それとも枕が足りないので服を畳んで枕代わりにしたのか？どうもいまひとつ、よくわからないが、面白い歌だ。④は「晩秋一日」一連の中の作。結婚十年目だと他の歌で詠じているが、昭和二十二年作で、祖国へ引揚げて子ども達を中にして、ようやく家族一緒に逢えた安堵感が、この淡々とした表現の一首に溢れている。夫婦水いらずの会話がきこえてくるようである。下句のズバリと言った断定が、却って余情を湛えている。⑤は「記録」大連作（二〇二首）中の「胡盧島岸壁」一連の中にある。悲しく辛い敗戦と汚辱の経験の果てにやっと外地から引揚げて来たみじめさ。僅かな所持金を袋に入れ首に下げ、雨にうたれて岸壁に立っているのである。しかし、その悲しさも、親のわれわれよりも子どもらは早く忘れるだろう、と自らを励まし、慰めているのだ。くしくも筆者もこの作者と同じく、満州を発って昭和廿一年秋、錦州の胡盧島から復員し、博多に上陸した。その体験は忘れられない。⑥は『黄衣抄』より抄出、「霜」一連に

ある。昭和廿四年作である。合著歌集『新選五人』にも収められている。前年の暮れに、引揚げてから福島に別居中の家族が上京して転入し、一緒になった。妻子が側に寝ていて、作者は小机に向っている静かな晩——やっ  
と取戻せた平安なのである。作者には家族愛の歌が多く、良き家庭人であることがわかる。⑦は『長謡』より抄出。「心音」一連の中にある。これは孫の歌である。  
昭和四十三年作だから、この年、作者は還暦だ。四人の男の子たちもそれぞれに成育し、大学在学中の四男を除けば、皆社会人になっている。この孫は長男の息子か？  
作者はもう世の中のわずらわしさも遠いような思いで、愛孫の爪を剪ってやっている。爪が飛ぶが、その細く切った爪が眉引のようだという。眉引は眉墨で眉をえがき引くこと、また、その眉だ。万葉集などにもある古語で、美しい形容である。

（お茶の水女子大学）



## ニュージーランドにおける

### 就学前教育の歴史ならびに現状（九）

松川由紀子

#### (5) 家庭教育

ニュージーランドの幼児たちは、就学前に家庭でどのような教育を受けているのだろうか。広い意味でのしつけについてであるが、ここではいくつかの研究を紹介して、その概略をみていきたいと思う。

就学前の幼児の家庭教育、しつけについての先行的な研究は、リッチ夫妻が六〇年代中葉に、マクドナルド女史が六〇年代末から七〇年にかけて実施した調査に基づいて報告されたものなかにみられる<sup>80)</sup>。前者の研究は、マオリと欧州系の家庭教育、しつけの差異を明らか

にしている。後者の研究は、就学前教育に対する母親の意識全般についてマオリならびに欧州系に問うているが、そのなかにしつけに関する項目がみられる。七〇年代中葉から後半には、リッチ夫妻がさらに研究を継続し、報告している<sup>81)</sup>。また、ダニーデンの広領域児童発達研究プロジェクトによる調査報告のなかに、家庭教育に関する研究もみられる<sup>82)</sup>。そして、八二年には、筆者が「世界の幼児のしつけの研究」プロジェクト（代表、日本女子大学教授村山貞雄）の一環として、この国の就学前の幼児を中心にしつけに関するアンケート調査を実施した<sup>83)</sup>。

こうした研究をもとに、以下、六〇年代中葉から七〇年代初頭、さらに七〇年代中葉から八〇年代初頭の家庭教育、しつけについて、その大筋をみようと思う。なお、就学前の幼児の家庭教育に何らかの影響を与えている両親教育についても、プレイセンタの場合を中心にしてふれたいと思う。

#### ①六〇年代中葉から七〇年代初頭の家庭教育

この国の就学前の幼児の家庭教育、しつけについての先駆的な研究は、リッチ夫妻によって六〇年代中葉に面接調査がなされ、七〇年に最終的な報告が出されたものである<sup>8)</sup>。ここでは、四歳児をもつ一五一名の母親（さまざまな地域に住むマオリと欧州系の母親）にしつけに關係する七二項目の質問をして、一般的な傾向とともに人種、地域による差異を明らかにしている。この研究によると、しつけの責任は、平均的には、五十五パーセントの者は母親にあるとし、三十五パーセントの者は両親にあるとしているが、欧州系の農家の五十四パーセント、欧州系の都市部住民の四十二パーセントの者は両親にあるとしている。一方、地方の小さな町や共同体のマ

オリは、大半の者が母親にあるとしている。また、しつけに關する意見は、約六割の者が夫婦でほとんど一致していると答えている。一般に、テーブルマナーについてはきちんとしつけられているようである。体罰については、約六割の者が効果的方法であると考えているが、実際に体罰を与えることは控え目で、むしろ、理由を説明したり、ほめたりしてしつけている。しかし、マオリの場合は体罰をかなり頻繁に用いている。特に、農村のマオリ共同体では、ほとんど体罰を効果的であるとは考えないのに、体罰がよく用いられ、理由を説明したり、ほめたりすることは少ない。これは、伝統的なマオリのしつけの方法に基づくものであるが、いつも幼児たちはきびしく扱われているわけではない。いわゆる赤ちゃん期は黄金期とも称され、まわりの大人たちからいつも大変な愛情を受ける。二歳前後から仲間のなかで過ごすことが多くなり、子どもだけの遊びの世界を体験するようになる。ただ、大人の前で大人に氣に入られないことをすれば、体罰が加えられる。つまり、仲間との楽しい遊びの生活ときびしい体罰との両面がみられるわけである。ところが、マオリの都市居住化が進行するにつれ

て、幼児は仲間との生活が非常に少なくなり、いつも母親の面前で過ごすようになる。幼児は息抜きができず、何らかの不完全なことをすると絶えず体罰を受けるようになる。また、共同体では多くの大人が親業に加わっていたが、都市では母親ひとりしつけの責任がかかり、しかもそれまでのしつけの方法は都市では一般的にはみられないので、母親の悩みは大きくなり、精神衛生が悪くなる。こうして、都市のマオリはかなりの葛藤のなかで幼児のしつけをしている。

では、体罰を否定するしつけ、いわゆる許容的なしつけは、当時、どのくらい受け入れられていたのだろうか。マクドナルド女史は、六七年にウエリントン郊外の二カ所のプレイセンターに参加する七八名の母親（その多くは欧州系）に就学前教育全般ならびに母親自身のことなどに関して面接調査をした<sup>6)</sup>。それによると、三割余の者が家庭における許容的なしつけに賛成しているが、一般的傾向としては受け入れがたい考えのようであった。また、同女史が、七〇年にさまざまな地域に住む一〇三名のマオリの母親（十九カ所の何らかの就学前教育の場に参加している）に同様の面接調査を行なった

が、それによると、二割余の者が家庭における許容的なしつけに賛成し、大半は反対していた。つまり、体罰を控え目にするか頻繁にするかの差異はあっても、体罰を否定する許容的なしつけの考え方は、マオリ、欧州系とも一般的には受け入れられていないものであった。ただ、就学前教育機関においては体罰は否定されていたので、就学前教育の場を通しての（とりわけプレイセンター運動の）両親教育に積極的に参加する母親には、許容的なしつけに賛成する者がより多くみられたことも同女史の調査で明らかになった。つまり、許容的なしつけの受容には就学前教育機関における積極的な両親教育の与える影響がみられるのであった。

家庭教育における許容的なしつけならびに父親参加は、七〇年代中葉以降、さらに促進されていったのだろうか。

## ②七〇年代中葉から八〇年代初頭の家庭教育

ダニーデンでは、オタゴ大学医学部を中心に広領域の研究者が児童発達研究プロジェクトを組み、七二年四月から七三年三月までに市内で生まれた子ども約一〇〇〇



名の発達、健康ならびに関連事項について、誕生時から今日までずっと追跡している<sup>90)</sup>。この研究のなかに家庭教育についての部分がみられるが、それによると、家庭教育、しつけのしかたの違いが家庭の社会経済的な位置の差異によってみられ、それが(三、四歳時点ならびに五、七歳時点における)子どもの言語、知能、行動面の発達にも影響しているという<sup>91)</sup>。では、どのような家庭教育の遠いがみられるのだろうか。社会経済的に恵まれた家庭では、母親の知能、学歴も高く、(大学あるいはプレイセンターの両親教育コースなどで)子どもの発達に関する教育を受けている者が多く、しつけの態度も権威的ではなく、本の読みかせは多く、子どもにさまざまな経験や活動の機会を用意し、そしてテレビ視聴は少ない。一方、社会経済的に恵まれない家庭では、母親の知能、学歴は低く、子どもの発達に関する教育を受けている者は少なく、しつけの態度も権威的で、本の読みかせも少なく、子どもにあまり経験や活動の機会を用意せず、そしてテレビ視聴は多い。こうした傾向が、統計的に明らかにみられたという。このダニーデンの研究では、研究対象児の九十三パーセントが就学前教育機関に

通っていたので、就学前教育を受けるか受けないかによって発達面に差が生じたのではなく、むしろ家庭環境、家庭教育の差異によるものであると結論している。ただ、残念なことに、ここでは家庭教育における父親の位置については全くふれられていない。

家庭教育における許容的なしつけは三割程度の家庭でなされているが、残りは権威的なしつけがなされていると、リッチ夫妻は、七〇年代中葉のいくつかの研究を一般化して述べている<sup>92)</sup>。そして、体罰のある程度効果的であると考えている者が八割位もみられると述べている。では、父親参加についてはどうかであろうか。ある七六年の調査によると、女性は第一子出生までに職業をやるものが一般的で、家庭教育の責任は母親であると考える者が七割程度もいて、両親が共有すると考える者は三割程度であったという<sup>93)</sup>。こうしたことは、六〇年代中葉にリッチ夫妻が研究した当時とほとんど変化がみられない。また、マオリのしつけのしかたもほとんど変化はみられないという<sup>94)</sup>。ただし、家庭外労働に従事する婦人は増加しており、父親は以前よりもしつけに若干参加するようにはなった<sup>95)</sup>。

八〇年代初頭はどうであろうか。筆者は、八二年一月にこの国の幼児のしつけに関するアンケート調査をしたが、これについてふれてみたい<sup>(9)</sup>。

質問は、幼児のしつけ全般に関するもので、一二〇項目からなっていた。調査対象は、オークランド、ウェリントン、クライストチャーチのフリーキンダーガルテンやプレイセクターなどに参加している親であるが、若干、小学校ジュニアクラスに通っている子どもをもつ親、あるいは全く就学前教育機関に参加していない子どもも含まれている。三七〇枚のアンケート用紙を配布し、二七七枚を回収した（回収率は七十五パーセント）。回答対象となった幼児の年齢は、四歳児が五十四パーセントで、二、五、六歳児も若干みられた。このうち、五十四パーセントの者はフリーキンダーガルテンに通っていた。残念ながら、親の人種を問わなかったで、人種によるしつけの特色をつかむことができず、ただ、都市部の（主として）フリーキンダーガルテンに通う三、四歳児をもつ親のしつけに対する一般的な傾向をつかんだにすぎないが、何らかおもしろい結果もみられる。

「あなたの家庭で、子どものしつけの方針を決めるのは主としてどなたですか」という質問には、選択肢として「父親」「母親」「その他」を用意していたが、「両親ともに」と記述して回答した者が六十三パーセントもみられた。「しつけについて夫婦で意見が一致しますか」には、八割余が「ほとんど（あるいはいつも）一致する」と答えていた。体罰については、「幼児期には必要である」と回答した者はわずか十一パーセントで、「なるべく与えないようにすべきである」と答える者が圧倒的であった。しかし、「子どもを叱る時にたたくことがありますか」と問うと、八割余の者が「ある」と答えていた。しつけ一般については、「親が子どもを理解し、愛し、励まし、成長を援助すべきである」といった内容の発言が、（いくつかの質問に留意されていた）「その他」の記入欄に記述されていた。また、家庭で絵本はよく与えられていて（九割の者が「よく与えている」と回答）、親が子どもと絵本についてよく話し合っている（過半数の者が「いつも話し合っている」と回答）ことがわかった。そして、一般に、テーブルマナーについてはよくつけられていたが、食べものの好き嫌いや食べ残しなど

については軽く注意される程度で、成長につれてこうした問題は解決されていくものとして柔軟な態度がとられていた。

これらの結果から考えると、これまでここで簡単に紹介してきた諸研究に比べると、家庭教育にかかわる父親が若干増え、許容的なしつけについての考え方もより受容されるようになったのではないかと思われる。とはいえ、父親参加、許容的なしつけの考え方は理解できて、(ほとんどの親が「子どもを叱る時にたたくことがある」と答えていたことからすれば)それがどの程度に実行されているのかは疑問である。しかし、少なくとも、この調査対象となったところでは、家庭教育への父親参加、許容的なしつけは望ましいものとして受容的に考えられていた。では、この調査は社会経済的に恵まれている者だけを対象にしたのだろうか。アンケート回答からは、親の社会経済的な位置はわからない。ただ、筆者はアンケート用紙を配布するために実際に多くのフリーキンダーガルテンやプレイセンタールなどに出かけて行ったのだが、その時の印象からすれば、それらは特権的な階層の人々が通うものとは欠して思えなかつた。も

し、この調査が社会経済的に恵まれた者ばかりを対象にしていたのではなかつたとすれば、許容的なしつけの考え方を受け入れたり、父親がしつけに参加したり、絵本をよく与えたりすることが、一般的な傾向として促進されつつあると考えてよいだろうか。また、筆者にはわからない。それは、今後の研究が明らかにしていくだろう。

次に、こうした家庭教育のありかたに何らかの影響を与えているものと考えられる両親教育について、プレイセンタールならびにフリーキンダーガルテンの場合をみてみよう。

### ③両親教育について

フリーキンダーガルテンでは、親が交代で日常の保育にヘルパーとして参加し、子どもの遊びを観察したり、教師と話し合ったりするので、ヘルパーは両親教育の場として位置づけられている。また、それぞれのキンダーガルテン委員会(委員はすべて園児の親)と教師が両親教育のために会合を用意し、フィルムを上映したり、お互いに話し合ったりしている。ヘルパーは、父親の参加が若干増えているとはいえ、母親である場合が一般的で

あるので、土曜日に特別に開園して父親が参加できるようにしているところもみられる。そして、若干の母親は、プレイセンターの両親教育コースに参加している。

なお、後述するが、キンダーガルテンの運営は両親が主体であるので、親は気軽に園に出かけ、保育観察、保育参加をすることができる。しかし、フリーキンダーガルテンの場合、両親教育への組織的な取り組みはみられない。

プレイセンターの両親教育は、フリーキンダーガルテンの場合と一般的な面では共通しているが、運動のなかで組織的に取り組まれている点は、非常に特色のあることである。両親教育（指導者養成と重複する）は、プレイセンター運動の核をなすものである。それぞれの地域のプレイセンター協会が両親教育の責任をもち、それぞれが独自に計画を立て、実施しているが、プレイセンター連合によって全国指導者資格の志願者に一定の基準が求められているので、各協会内の教育の内容はかなり共通しているようである。連合はさまざまな両親教育用の出版物を発行して、協会による両親教育活動を援助している。両親教育プログラムを概観してみると、参加開

始時にすべての親に対して導入の講話が三回なされる。親は交代でヘルパーとして日常の保育に参加し、子どもの遊びを観察したり、仲間の親たちと話し合ったりする。そして、両親教育の会合に参加するようにすすめられる。同時に、より積極的な両親教育のコースであるヘルパー養成コース、助手養成コースさらに指導者養成コースへの出席をも仲間からすすめられるのである。次に、両親教育コースの内容について、ウエリントンのプレイセンター協会の場合を表に示しておこう（表4）<sup>90</sup>。なお、ウエリントンの場合、ヘルパー養成コースは二段階に分けられている。

表4 ウエリントン・プレイセンター協会の両親教育のプログラム

コース名	教育内容
導入講話	<ul style="list-style-type: none"> <li>○プレイセンターの概略について講話を受ける。</li> <li>○遊びの重要性について講話を受ける。</li> <li>○ヘルパーについて講話を受ける。</li> </ul>
ヘルパー養成コース (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもの身体発達段階について学ぶ。</li> <li>○九領域の遊びを観察し、話し合う。</li> <li>○ヘルパーの役割について話し合う。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>○自由遊びを観察し、話し合う。</li> <li>○他のプレイセンターを見学する。</li> <li>○実際のなワークショップ（子どもの活動に参加し、さらに話し合う）に一回出席する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○八項目の遊び、活動に関する課題を完了する。</li> <li>○ある子どもに関する課題を完了する。</li> <li>○「あなたのプレイセンターを見て」と題するエッセイを書く。</li> </ul>	<p>助手養成コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもの発達に関する（初級の）講義に十回出席する。</li> <li>○助力者として十回セッションで働く。</li> <li>○実際のなワークショップに二回出席する。</li> <li>○保育活動に関する九項目の課題を完了する（いくつかのプレイセンターへの見学を含む）。</li> </ul>	<p>指導者養成コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○助力者として三十回以上セッションで働く（そのうち少なくとも三回は全責任をもった者として働き評価を受ける）。</li> <li>○幼児音楽、動きなどに関する教育を十五時間（週末あるいは朝夕）受ける。</li> <li>○養成用のワークショップに一回出席し、実際のなワークショップの運営を一回援助する。</li> <li>○子どもの発達に関する（上級の）講義に十回出席する。</li> <li>○保育活動に関する九項目の課題（助手養成コースのものより専門的なもの）を完了する（フリ</li> </ul>
---	---	---	---

ーキンダーガルテン、保育センター各一カ所の見学を含む。

プレイセンターの両親教育コースは、各プレイセンターで観察、話し合いの場を用意したり、大学の公開講座や成人教育の機会を利用したり、各協会が独自にコースを開催したり、あるいは通信教育を利用したりして運営されている。両親教育コースに参加することは、導入講話を除いて、義務的なものではないが、できるだけ参加するように励まされる。実際に参加している割合はどの程度であるのかわからないが、七六年にプレイセンター連合とマクドナルド女史が行なったヘルパーについての調査の報告のなかに、同年十一月十七日（あるいはその付近の日）に全国内でヘルパー当番にあたっていた者一三九六名を対象に調査したところ、一三六二名から回答があり（回収率は約九十八パーセント）、そのうち五十二パーセントの者が何らかの両親教育コースを終了、あるいは受講していたと述べられている<sup>10)</sup>。五十二パーセントの内訳は、三十六パーセントがヘルパー資格取得（あるいは受講中）、十二パーセントが助手資格取得（あ

るいは受講中)、四パーセントが指導者資格取得(あるいは受講中)であった。

なお、フリーキンダーガルテンやプレイセンターでの両親教育の他に、大学の公開講座、テレビの教育番組、(特別に必要な場合) 専門家による指導助手サービス、プランケット協会の保育指導(主として生後二年間)などがみられる。これらのさまざまな両親教育が何らか家庭教育、しつけのありかたに影響を与えているように思う。

## (6) 就学前教育行政

就学前教育サービスは、さまざまな形で、さまざまな組織によってなされている。その主なものを表に示してみよう(表5)。なお、この表は簡略化したものであり、実際はもっと複雑なものである<sup>8)</sup>。

このなかから、フリーキンダーガルテンとプレイセンターについて、その運営組織を概観してみたい。

フリーキンダーガルテンの日常の運営は、それぞれのキンダーガルテン委員会によってなされている。そして、各地域内のキンダーガルテン委員会の代表が協会の

メンバーとなる。協会は、協会内のキンダーガルテンを支配し、管理、財政面、新設計画の責任をもち、教師を雇用する(ただし、その給与は教育省が支払う)。フリーキンダーガルテン連盟は、全協会を代表する団体として、キンダーガルテンにかかわる諸事項について政府と交渉したり、教師資格を授与したりする(ただし、教師養成は国立の教育大学でなされる)。八三年現在の協会数は五四、キンダーガルテン設置数は五四一である。

プレイセンターの日常の運営も、それぞれのプレイセンター委員会によってなされている。そして、各地域内のプレイセンターの委員会の代表が協会のメンバーとなり、管理、財政面の責任をもち、プレイセンター新設の援助をし、両親教育(指導者養成)の計画を立て、実施し、ヘルパー資格や助手資格、指導者資格を授与する。プレイセンター連合は、プレイセンターにかかわる諸事項について政府と交渉したり、全国レベルでの政策を決定したり、全国指導者資格を授与したり、(両親教育用の)出版物を発行したりする。八三年現在の協会数は二九、プレイセンター設置数は六八二である。

表5 就学前教育サービスならびにその関与組織

就学前教育サービス	主な関与組織
<ul style="list-style-type: none"> <li>●フリーキンダーガルテン</li> <li>●プレイセンター</li> <li>●小学校就学前クラス</li> </ul>	フリーキンダーガルテン連盟、教育省、キンダーガルテン教師協会、プレイセンター連合、教育省
<ul style="list-style-type: none"> <li>●通信教育校就学前部</li> </ul>	教育省
<ul style="list-style-type: none"> <li>●移動キンダーガルテン</li> <li>●巡回キンダーガルテン教師</li> </ul>	YWCA、教育省、フリーキンダーガルテン連盟、フリーキンダーガルテン連盟、教育省
<ul style="list-style-type: none"> <li>●フリーキンダーガルテン・プレイセンターの障害児のクラス</li> </ul>	教育省、キンダーガルテン協会、プレイセンター協会
<ul style="list-style-type: none"> <li>●就学前教育助言サービス</li> <li>●保育センター</li> </ul>	教育省 (一部) 保育センター協会、社会福祉省
<ul style="list-style-type: none"> <li>●特殊保育センター</li> <li>●プレイングループ</li> <li>●テコハンガレオセンター</li> </ul>	精薄児協会、肢体不自由児協会 (一部) 教育省、その他 マオリ省、マオリ教育基金

<ul style="list-style-type: none"> <li>●病院内就学前グループ</li> <li>●個別的就学前クラス</li> </ul>	病院委員会 私立学校付設
---	-----------------

なお、教育省は、建物建設費用を大幅に助成し、設備面、運営・管理面への助成もかなりし、さらに専門的な助言サービスもさまざまな形で行なっている。とりわけ、キンダーガルテンの場合、教師養成ならびに教師の給与をすべて引き受けているので、人々のなかには、キンダーガルテンは（ほとんどすべての）小学校と同様に国立であるとさえ誤解している者もみられるくらいである。

こうして、就学前教育行政は、主として教育省による財政援助、専門的な助言サービスのもとで、親主体のさまざまな任意団体によって支えられている。ただし、任意団体の力が弱い場合（遠隔地や社会経済的に恵まれない地域など）は、教育省の関与が主体的となる。

(山口女子大学)

註

- ① 後註③④の辭彙‘體文’を參照せよ。  
 ② 後註⑤⑥の辭彙‘文’を參照せよ。  
 ③ 後註⑦⑧の辭彙‘體文’を參照せよ。  
 ④ 後註⑨⑩の辭彙‘體文’を參照せよ。  
 ⑤ Jane and James Ritchie; Child Rearing Patterns in New Zealand. Reed, Wellington, 1970.  
 ⑥ Geraldine McDonald; ‘Pre-School Education and Maori Communities: A Matter of Values’, in Douglas Bray and Clement Hill (eds.), *Polynesian and Pakeha in New Zealand Education* vol. II, Heinemann, Auckland, 1974.  
 ⑦ Geraldine McDonald; *Maori Mothers and Preschool Education*.  
 ⑧ 民生委員の役割と児童の成長成果の調査報告書の辭彙とを參照せよ。  
 ⑨ Rob McGee and Phil A. Silva; *A Thousand New Zealand Children: Their Health and Development from Birth to Seven*, Medical Research Council of New Zealand, 1982.  
 ⑩ ハルビンとウイグル 極東の辭彙と文化の交流をめぐっての考察と分析を參照せよ。  
 ● Phil A. Silva and David M. Fergusson; ‘Socio-Economic

- Status, Maternal Characteristics, Child Experience and Intelligence in Pre-school Children: A Path Analytic Model’, *New Zealand Journal of Educational Studies*, vol. 11, No. 2, 1976.  
 ● Phil A. Silva; ‘Experiences, Activities and the Pre-school Child: A Report from the Dunedin Multidisciplinary Child Development Study’, *Australian Journal of Early Childhood*, vol. 5(2), 1980.  
 ● Phil A. Silva, R. McGee, J. Thomas and S. Williams; ‘A Descriptive Study of Socio-economic Status and Child Development in Dunedin Five Year Olds’, *New Zealand Journal of Educational Studies*, vol. 17, No. 1, 1982.  
 ⑪ Jane and James Ritchie; *Growing up in New Zealand*, p. 104.  
 ⑫ Rosemary Novitz; ‘Marital and Familial Roles in New Zealand: The Challenge of the Women’s Liberation Movement’, in P. G. Koopman-Boyden (ed.), *Families in New Zealand Society*, Methuen, Wellington, 1978.  
 ⑬ Jane and James Ritchie; *Growing up in Polynesia*, George Allen and Unwin, Sydney, 1979.  
 ⑭ Novitz; *op. cit.*

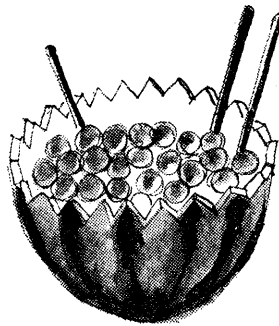


(93) 松川由紀子・村山貞雄稿「ニュージーランドにおける幼児のしつけ調査研究」、日本保育学会第三十六回大会研究発表集、一一六—一一七頁(なごびに補足資料)。

(94) コースの具体的な教育内容については、ウエリントン・ブレインセンター協会から送付していただいたパンフレットをもとを示した。

(95) Geraldin McDonald; Working and Learning, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1982.

(96) この表は、ミード女史の作成した表をもとにして若干加筆修正した (Anne Meade; Public Participation in New Zealand Pre-school Education, Department of Sociology, Occasional Paper, No. 4, Victoria University of Wellington, 1981, p. 2.)。



“幼語り”をいろいろな方々に御依頼  
してありますが、波多野完治先生にも御登  
場をお願い致しました。七十九歳を迎え  
られる児童心理学者は、しかし、いまだ  
自らの幼児期は語りたがりませんでし  
た。『泣いた赤鬼』という題名の喜寿記  
念集のある先生には、児童心理学へ向う  
原点でもあった、幼児期の或るこだわり  
が活きていて、今もって書けないと言わ  
れるのです。そして、それは、また何と  
いう美事さでしょうか！

私どもの依頼にかえて、滅法本好きな  
先生が執筆の労をとって下さったのが、  
岩波書店から現在、刊行が続けられてい  
る「子どもと教育を考える」シリーズの  
一冊、高橋恵子著『自立への旅立ち』に  
寄せた一文でした。

この岩波の新シリーズは、親・教師・  
保育者におくと掲げられ、混迷した育  
児・教育問題に、既成の説明をあてはめ  
ることなく、人間文化のニュー・ウエイ

ブを探索する企画のように見うけられま  
す。津守真先生も、『自我のめばえ——  
幼児の世界の探究——』の一卷を執筆さ  
れており、刊行が楽しみに待たれます。

○

今号のテーマ特集は、「子どもと環境」。  
園舎、遊び場、子ども部屋……さらに多  
様な子どもがいる場所を取り上げるべく  
努力しましたが、すべてはかないません  
でした。女性建築家として御活躍してい  
らっしゃる小川信子先生のお話による  
と、昨年は、国際婦人建築家協会の創立  
二十周年で、四月、パリで国際大会が開  
催されたということです。そして、その  
大会記念テーマには、子どもにかかわる  
施設建築が選ばれ、参加国五十七ヶ国の  
女性建築家が、政治的国境を越えて集  
い、討議がなされたと言います。子ども  
の環境は、世界的な関心事として動いて  
いるようです。さて、次号は、緑蔭図書紹  
介の特集です。どうぞお楽しみに。(美)

## 幼児の教育 第八十三巻 第七号

七月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十九年 六月二十五日 印刷  
昭和五十九年 七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本紙御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします

\*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

# 新刊!! 保育イラストブック

絵/江川厚子・奥谷ます子・冬野いちこ・ふじたひでみ フレーベル館 編

## 園だよりのアシスタント! 楽しいイラストがどのページにも!

- ルーズリーフ式で複写がカンタン。原稿作りがスピーディにできます。
- 現場の先生方のもとめにぴったりのイラストばかりです。
- 使いやすい小型サイズ（1cm～3cm四方位）のイラスト。
- やさしい線画で、色ぬりもできます。
- ご自分のオリジナルイラストのヒントとしても役立ちます。
- 拡大すればカードやコーナー飾りなど、使い道もひろがります。



A5判・ルーズリーフ式・104頁・定価1,600円

# 新刊!! 保育の見直し 1,000日の実践記録

大戸美也子/横浜学園付属元町幼稚園(58年度倉橋賞・受賞グループ)

## 子ども主体の保育を実現するために、試行錯誤したある園の1,000日の足跡

子どもの幸せってなんだろう。この園で保育をうけている子どもたちは幸せなのだろうか？

こんな素朴な疑問から保育の見直しを始めた元町幼稚園の先生たちの記録です。

全員で現職研修をうけ、親たちのつきあげにもめげず、保育の細部にわたって一つ一つ検討し、改善していきました。その五年余にわたる保育の移り変わりを記録にまとめたもので、保育研修の指針としても参考になる好著です。



B6判・256頁・定価1,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292 7781(代)にお問い合わせください。

## フレーベル館

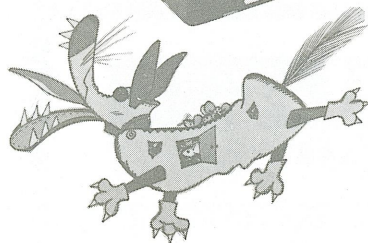
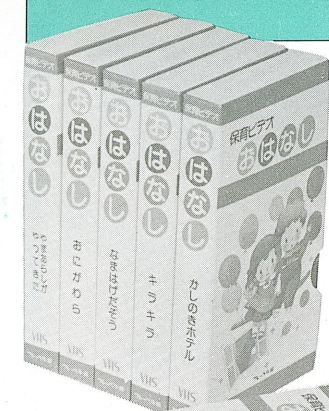
もうヒーローになったつもり! 感動のビデオタイム

# おはなし

保育ビデオ  
全 24 巻

勇気、友情、冒険そして……

夢ひろがるアニメーション  
＝オリジナルです。



各集2巻1セット ¥25,000

おはなしビデオシリーズは、幼児に夢とやさしさ、そして勇気を与えます!  
年間12集を毎月1集(2巻1セット)ずつ発売いたしますので、年間購入をぜひお奨めいたします。

集	タイトル	集	タイトル	集	タイトル
第1集 (発売中)	アンパンマンとばいきんまん かしのきホテル	第5集 (発売中)	ラーメンてんし おにのたいこ	第9集 (9月発売予定)	にじのはしかかかるとき ハムスターのドンパ
第2集 (発売中)	キラキラ なまはげだぞう	第6集 (発売中)	五つのはなのえき アンパンマンまじよのくにへ	第10集 (10月発売予定)	ライオンそらをとぶ あざらしチック
第3集 (発売中)	おにかわら やまあらしがやってきた	第7集 (7月発売)	おかあさんのふえ にげだしたおおとこ	第11集 (11月発売予定)	ねずみのチャップ おうさまはだれだ
第4集 (発売中)	とらねこめいたんてい こびとともいむし	第8集 (8月発売予定)	ロンロンじいさんのどうぶつえん ことりのふえ	第12集 (12月発売予定)	ちゅうしゃのこわいムーじいさん さいごのおきやくさま

※保育のために生まれた、オリジナルのおはなしシリーズは、子どもたちにも大変喜ばれ、  
保育現場でも楽しく活用出来ることと確信いたします。



**Victor** ビデオはビクターVHS **4ヘッド8時間**

やっぱり、ビクター。鮮やか、簡単、安心、3拍子  
そろった有能ビデオです。

**ビクタービデオカセット BR-7110 ¥139,800**



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**